第二百三十七號
明治三十年二月十四日第三種郵便物認可
大正三年十一月十五日發行（毎月十五日發行）

◀軍國民の必讀すべき書▶

天晴會講演錄

（第貳輯）（價格金貳圓也 郵稅金拾貳錢也）

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に。また國民思想教養の上に。殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは。須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内容
林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
田中智學先生等の講演也

精神の修養
思想の調整

（各一部 金貳拾錢也）
（二部 小包 金八錢）
（一部 郵稅 金六錢）

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして。帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申込——東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹。送金は（振替口座東京二八八四〇番へ拂込む事）

拾貳月號

第二百三十八號

統一

▲大正三年は複雜多樣の歷史也▲

觀よや、歐亞の天地は漠々たる戰雲に包まれ、文明の意義人道の權威は疑問せられたり、而して何時の日か戰局を告ぐべきかは是れまた明かならず、世界文明の爲に深く之を憂ふ

我東洋に於ける決戰の飢捷は、國民齊しく之を謳ふに到れるも、されど是れたゞ軍事戰鬪上の第一結末なるのみ、さきに諸般の問題は錯綜して的確なる斷案は前途なほ遠きを覺ゆ

大正三年に於ける國運は、混雜の中にも幾分の建國的理義を實現するものありしも、內に國民の思想を觀れば、病見多くして其歸趣を失ひ、分裂動搖正しく事實にあらずや、あゝ危哉、此時に當り國と人とに大道を示して活力を賦與する者は日蓮主義あるのみ、日蓮主義は國家發展の動力也、國民躍進の活力也、日蓮主義は佛教內の局部思想にあらず、世界の各思想の全部を內包し之が調節し統一したる大思想也世界人類の歸命すべき大宗教也、我國民はこの大宗教に依て訓練せらるべき特權を有す、須らく公正の見地を持して日蓮主義の本義を味ひ、國民的信念と實力を養ふに努めよ、大に自覺一番して此方向に進み來れ（三上生）

■天晴會發行■大正三年度■大正四年一月一日發行■

天晴會講演錄 第三輯

定價金壹圓五拾錢
本文約八百頁
總クロース上製美本
日蓮上人御尊像及
講演會寫眞入り
送料(内地金拾八錢
朝鮮滿洲臺灣金四拾錢)

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凛乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間的全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豐富なるかは一讀して之を知るを得べし

直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

内容

姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。筧作文學博士。
臨田權大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。
其他諸名士の說を讀め

發賣元 東京市神田區美土代町二、一 三秀舍
電話本局二〇七九番三三八四番
振替口座二五七四七番

發賣所 東京市小石川區白山前町十七 三上義徹
振替口座東京二八八四〇番

日蓮門下の統合私見

本多日生

聖祖門下七教團の統合事業に就て私見を申し述べ樣と思ふ。丁度本月の八日に七教團の管長及代表者が池上に集まりまして統合歸一の宣言書と決議と其實行の申合せを致せしは大體御承知の事と思ふ、さて此統合事業に對して敢て反對する者は無いことゝ信じまするが、併し事柄が極めて重大なるが故に容易に大成は出來まいとか、或は實行しても其の統合の性質が充分には行くまい等と憂慮して色々批評する者があるやに見受くも、其の批評の中には或は多少の反感を含める者もあり、或は小さな利害關係から統合の大業に反對せんとする者もある、併し大體を概觀せし所に於ては之ぞと云ふ反對の理由を有するものは一もなく、統合反對の議論は殆ど顧慮すべき價値あるものはないのであります。然るに今自分が此の講題に就いて述べやうとするは、至誠を以て此の大業を成就せんとするものの間に、何等かの參考に供したいと思ふからである。

一、統合の理由

第一に申述度いことは統合の理由である。今日統合を實現せんとする理由は誠に明白で、決して反對する事が出來ない正々堂々たる理由が存して居るのであります。元來日蓮上人は我々の信仰より申せば、本化上行の再誕である事は誰しも信じて居る所であり、其の本化上行が法華經神力品に於て付囑を受けられた、法華經弘通の特權を釋尊より與へられて居ります

其の事は經文に誠に明白てある、他の宗旨て其の祖師を勢至菩薩の再誕なり等と主張するのは全く憶測てあるが、上人が上行の再誕てあると云ふは勸持品二十行の偈を身讀せられた的證がある、御遺文に

『日蓮無ば誰をか法華經の行者として佛語を扶けん』

此の事は他宗の人も一言なき所てあります、然して上行菩薩が釋尊より授けられたる使命を上人自ら左の如く仰せになつて居る、如說修行抄に

『かゝる時刻に日蓮佛勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ』

而して其の佛勅とは明かに法華經神力品に示されたる

『如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及次第を知つて義に隨つて實の如く說かん日月の光明の能く諸々の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅し無量の菩薩を敎へて畢竟して一乘に住せしめん』

佛敎が紛亂して來て其の適從する所を知らざるに至る其の時に、經々の因緣及次第を心得て佛の本意に基き、眞實の通りに佛敎を說くべき使命を授けられて居る、其の代り汝が世に出て、我が委托の如くに行ふならば、恰も日月の光が一切の闇黑を照破する如くに、汝の言動に依て一切衆生は精神の闇を除かるゝてあらう、然して其の除き方は相手の機根に從つて分裂的に敎へを施すのてはない、無量の菩薩（人間）を敎へて畢竟して一乘に住せしめるのてある、多くの人々を能く敎へて徹底せしめて統一の敎に來らしむるのてある畢竟住一乘とは統一せる敎へに依て一切衆生の信仰を纏め上げべき使命てある。之が上行の使命てある。故に如說修行抄の佛勅を奉じ云云の下に、上人は

『諸乘一佛乘に歸して妙法獨り繁昌せん時』

を仰せられて居る、即ち諸乘を一佛乘に統一し終るのが本化上行の使命てあり、法華宗の僧侶はこの使命の下に活動を續けて居るのてあります、如何に不明の僧てあつても之を心得ない者はあるまい。

又上人は開宗の當時に旭に向つて題目を唱へて居られる、此の事は誰しも知つて居る處てあるが、之が非

常に深い意味を有して居るのてあります、上人は太陽を拜んだのてはない、然らば何をしに行つたのか、太陽に相談しに行つたと云ふのてもあるまい、其の事は深く研究せずとも、上人は豫ねて仰になつて居る、

『日は東より出てゝ西を照す』

西に沒せんとする日にあらずして、東より出づる日を拜されたのてある、この意味は先づ我國建國の大精神を奉じて日本の文明を完成し、然る後に世界を照さんとの寓意てあつて旭に向つて開宗を宣言されたのてある、日本より起つて世界の文明を完成せんとの大なる理想を暗示されたのてある、之は一つの考へ方てあるが、他の見方は太陽の光は一つてあるが、多くの星の光を打消して然も數多の星よりも一層明るいものてある、世界中には種々の思想敎訓道德宗敎等澤山な星の光がある、それ〳〵を比較すれば或は少し大きいとか小さいとかの明るさの相違はある、然し一度日出づれば星の光も電燈の光もなくなつて了ふのてある、上人は斯の如き敎の統一を理想して太陽を好まれたのてある、曰く

『明らかなること日に過ぎんや』

と、太陽の光は一つてはあるが、然も總ての光を合したるよりも更に大なる光を與ふるものてある、上人は日蓮の理想も亦斯の如しとの抱負を以て

『日出てゝ後の星の光り』

と仰せられたのてあります。高僧碩德其數多からんも總て星の光てあり、日蓮は太陽の光てある、斯かる抱負よりして、上人は太陽に向はれて、汝のみ我が理想を語るに足るとのお考へから、旭に向つて開宗を宣言されたものと考へらるゝのてあります、其の他斯の如き統合の理想の上人にあつた事は何人も思ひ浮ぶ處てあらうと信ずる、さう云ふ點に就て爭はんとする者は一人もなからう、これが即ち日蓮主義的の精神てあり丁度民族に民族精神の存する如く、日蓮主義者の中には一般に普及せる處てあると信ずるのてあります、今日敎化衰へたりと雖も、この日蓮主義の光を以て總てを照さんとの理想は決して滅びて居ない、譬へばお會

式に萬燈をかついで行くにしても、一天四海皆歸妙法と記してある、これが即ち日蓮主義的精神であります。

又上人は安國論を作り之を先づ活動の手始として世間に發表せられたが、其の安國論の大體は何處に落付いて居るかと云ふと、矢張り思想信念の統一を敎へんとなされたに外ならぬ、即ち

『汝早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ』

之が安國論中最も大切なる聖語である、正法を立つると云ふは實乘の一善である、實乘の一善とはあらゆる思想信念を綜合し來つて之に統一を與へた所のものである、この統一敎が法華經の特色であり、法華の諸經を駕御せる所以であらうと思ふ、故に佛敎反對の富永仲基すら法華に許すに

『法華は併呑權實の說』

と言つて居る、そこで信仰の寸心とは種々の敎に分裂して居る小さな信念を指す、其の小さき信念を改めて實乘の一善即ち統一主義に歸せよと仰せられたのであります、されば日蓮門下の上に分裂を生ずると云ふは排斥せられた信仰の寸心に走る事になつて居る、元來分裂は半面を知つて半面を忘れるから起るのである、若し物を圓滿に見るならば決して分裂は起らないと云ふのが日蓮上人の主義であります。

尙上人は斯く統一の主義をお示しになつて居る外にかの有名なる異體同心の敎訓があります、恰も億兆一心の勅語の如き權威を以て日蓮主義者は異體同心を旨とすべきを嚴令せられて居る、大志願を達せんとするには異體同心でなければならないと呉々も仰せになつて居る、即ち

『異體同心なれば萬事を成じ同體異心なれば諸事協ふ事なしと申す事は外典三千餘卷に定まりて候、殷の紂王は七十萬騎なれども同體異心なれば軍にまけぬ、周の武王は八百人なれども異體同心なれば勝ぬ、一人の心なれども二つの心あれば其心たがひて成ずる事なし、百人千人なれども一つ心なれば必らず大事を成ず、日本國の人々は多人なれ

ども同體異心なれば諸事成ぜん事かたし、日蓮が一類は異體同心なれば人々少く候へども大事を成じて一定法華經ひろまりなんと覺え候』

と仰せになつて居る、この遺訓に對しては日蓮主義者は何人も反對する能はざる處であります。要するに上人の主義は統一主義に存し即ち分裂を大に忌み嫌ふ所のものである、かく考へ來れば統合の理由は斷じて異論すべきでないと信ずるのであります。

又宗門の歷史に就て考へまするとと、統合を計畫せし人は極めて多いのである、最初に富士身延の間に問題の起つた時でも、一同が其の融合について考へたが、意思が疎隔して不本意ながら分裂の狀況を呈したのである、五人所破抄に依れば、其の問題は今日より見て相互の間に融合を遂ぐるに餘り困難を感じない事と思ふ、其次に分れたのは陣師であるが、最初小さい弘通所を造られたが併し分派の考は毫もなかつた、本國寺の日傳上人が分らないと云ふので別になられた、併し寺を造らずに居られた精神を窺へば、其の內に解る時節もあらうと自ら慰めて居られたのである、畢竟學問研究の上に見解を異にせられたに過ぎないのであつて、それも大した事でなかつたのであります、其次に分派したのは什師であるが、之は師の遺訓にもある如く、如何なる派に屬するか等の事は問ふ所でない、經文と遺文の如くに說く人であるならば、隨身いたすべしと仰せになつて居る、或人は自分等が時代にかぶれて統合の計畫を行ると批評する者もあるが、其は我開祖よりの宗粹を知らない人々である、我々は開祖の遺訓を奉じて行動して居るに過ぎぬ、開祖は隨身致すべしとまで仰せになつて居る、隨身とは從者である、カバンを提げ又は茶を汲む事である、正義復興の際には如何なる地位學德ありとするも、茶を汲みカバンを提げて統合の大業の爲に努力せよと云ふが開祖の我等法孫に遺訓せられた嚴令である、其他各派を通じて先師先輩は常に統合の事に焦慮されて居る、深草の元政上人鍋冠日親上人等は其の著しき者であり、多少考のある人々は何れも此事に苦心しない者はなかつ

たが、心ならずも兄弟墻に鬩いて以て今日に至つたのであります。

そこで嚴格に日蓮主義を奉ずる以上は、上人の法流は必らず統合せねばならない、統合は日蓮主義其のものより敎へらるゝ所の必然の結果であります、其の他多くの理由を擧げ得らるゝが元々日蓮主義が分裂を否定する主義である已上、分立割據は眞先に破らねばならない事は多言を要せぬ事と思ふ、丁度日本の天職を全うするには、先づ以て藩閥を打破し、政令一途王政復古を實現せねばならぬ、人心の統一を計つて然る後始めて外に向つて發展し得らるゝのである、若し藩閥を其の儘にして置て、而して日露日獨の關係が起つたとしたならば實に危いことではあるまいか、維新の當時には、各藩の間に種々の事情もあつたらふし、又武士は俸祿を奉還して隨分困つたであらふ、然し之は致し方のない事である、それは日本國家の使命を果すために餘儀ない事であるとして、今は維新の鴻業を歡迎せない者は一人もないのである、之と同樣に宗派の小さき事情から考へれば、或は統合しない方が都合のよき者もあるかは知れないが、斯かる事は齒牙にかくるに足りない、大事の前の小事であつて論ずるに足りない、只こゝに何うしても統合の理由に反對する事の出來ない點は、日蓮主義を奉ずる者としては上人を捨つる能はず、遺文法華經を捨つる能はず、而して日蓮主義の使命を果す爲に盡さねばならぬ以上は、如何にしても統合の事業に反對し得られないと信ずるのである

嘗て吉田松陰先生が勤王の大義を主張せし時、あの通り德川が壓制を加へ、勤王の士を牢獄に投じ或は切腹を命じた、松陰先生も遂に捕へられて萩より江戸に送られ、千住の小塚原で斬罪に處せらるゝ事になつた、其の時に云つて居らるゝ、松陰は微々たる者である、松陰の一身は蚊虻に均しき者である、併し松陰が抱懷して居る理想は勤王の大義であり、日本では天子樣を大切にせねばならない、忠義を捧げねばならない、如何に德川が勢力あり各藩の大名が割據して居つても、それは私事である、日本人たる以上は勤王の大義を

忘れてはならない、又日本の國家は國の初より、世界に大業をなさねばならないと神勅に依て示されて居る所謂天下を光宅すべきである、其の日本の國家が今の如き有樣で終るべきものでは斷じてない、大名が割據して居つて、黑船がやつて來た爲に、ブル〳〵震へて人心胸々として居ると云ふ、日本の國家が斯の如き有樣で終るべきではない、松陰の身は蚊虻に等しきものではあるが、抱く處は勤王護國の大義である、我國を發展させねばならないとの忠愛の精神は虎豹の猛威を以てしても決して破る事は出來ない、今に日本擧つて我說に贊成する時が來るに相違ない、松陰の精神は天地神明を味方とせる已上は何物も恐るるに足らぬ、或は肉體は破らるゝ事はあらんも、此の勤王の精神は決して破るべからずと云はれて居りますが、七敎團の管長中には必ずや意氣精神に於て松陰先生に比すべき人もあらう、日蓮主義は決して斯の如き狀態で終るべきでない、上人があれだけの苦心を以て建設されしこの主義は、一時德川の政策の關係から斯る有樣に陷つては居るが、然し他よりの妨害を除き去られし今日、主義者自身が覺醒するならば、決して今日の如き有樣で終るべきでない、然してこの統合の大精神を奉戴して奮鬪せる者に對しては、佛天三寶は加被し給ふならんこの之を唱ふる者は縱し蚊虻に等しくとも、七敎團の間に漲り來れる此の統合の大精神は必ずや實現さるゝに違ひない、この信念この意氣は何人も破ることは出來ないと信ずる。

二、統合の必要

第二に申述たい事は統合の必要であります、必要は細かく數ふれば種々に分れるが、大體二個の方面に於て必要と認むる事が出來る、一には外部の方より來る必要であつて、外部の刺戟によつて各敎團は統合して大活動を起さねばならぬ必要が迫つて居る今一つは內部より起る必要であります、然し其の前に一言申述たき事は、統合に關する吾人の希望である、それは何が一番先に事實に現はれるかと考ふれば、今の各敎團を

蔽へる惰氣の一掃であります、惰氣とは腐敗沈澱の氣分であります、之を一掃する事が統合問題に由つて得らるゝ則現象であると思ふ、細かい學說や理論の可否を論ずるよりも、主義者の人格と信念とに生々潑溂たる所がなくては何の働きも出來ない、若し道念信仰の復活を見ないならば統合も教義も何の價値もあるものでない、故に前に以て淸新なる意氣信念を各教團の上に來らしめん事を予は切望するのであります、是は到底尋常の手段方法を以てしては、其の目的は達せられぬ、そこで日蓮主義の各教團を開放するのも或は面白いかとも考へらるゝが、兎に角大なる驚を與へ、然してグヽ〳〵イビキをかいて居る者の眠を醒すが大事である、この潑溂たる意氣精神の復活の爲に統合問題は歡迎すべき事と思ふ。

そこで第一に外部より起り來る必要を擧ぐれば、一には我國の思想界の狀態が、健全なる教化を要求する事が强く現はれて居る、國民思想の混沌たる狀況、其の動搖を何を以て之れを救ふべきかは緊要の問題である、學者の相談に依ては容易に結着を見られない、或は文部省の官吏が何とかするであらうと考ふる者もあろうが、文部省にのみ希望を屬して止むべきでない、現代の思想の狀態をこの儘に放任すべきにあらずとは多くの人によつて考へられて居る事である、然し進んで何を以て之れを救ふべきかに至つては、之れに對して確信を有する者は恐らく少ないと思ふ、二ノ宮主義を以てすべきか、基督教の道德に依るべきか、論語孟子の教訓を以てすべきか、學校の教育に滿足すべきかこれ等總ては現代の思想界を匡救すべき全き方針にあらず、實に今日の我國の社會は社會を指導訓導すべき必要なる機關を欠いて居る、何うしても非常に强い力を有し、何人も感化し能ふ活力ある教を要し、之を以て人心を導かねばならないのである、其の爲には佛教各宗の中華嚴の哲學を以てすべきか、天台の一心三觀に依るべきか、淨土の單信念佛驗通念佛の百萬遍にて可なるべきか、或は種々と起り來る神道者流の教會御嶽教か、天理教か、何を以て之を救ふべきか、一夜

作りの教を以てしては到底駄目であらう、之はどうしても日蓮主義の復興に由つて救濟するの外完全なる道がないと信ずる一人である、否只信ずるのみではないそこに確實なる理由が存するのである、事實實際に現代を研究すれば日蓮主義の外之を救濟する教は存しないのである、つまらない事柄は何の教にもある、譬へば横着をしてはならないとか、正直にせよとか云ふ樣な事柄は何に依ててもゆる事が出來る、二宮主義でも、論語孟子でも、天理教蓮門教でも充分である、然し根本的に解決を要する大切なる問題は、個人主義の精神と國家主義の精神と、博愛主義の精神と、及宗教的精神との衝突であつて、此等はどうしても解決せねばならない、現代を襲ふ根本問題であります、一往考へると此等思想の何れにも相當の理由が存在して居り個人主義は國家主義を批評し、國家主義は博愛主義を批評して居る、而して學問識見の足らぬ者にはなかなかに適從すべき所が判らない、加ふるに生煮の頭を以て新聞に講談に輕卒なる議論を發表するからたまつたものでない、そこで此會の根本問題の解決は殆んど望み難き光景を呈して居る、或は考慮なき宗教家は無暗に非國家主義を唱道し、或は學校教育の方は狹隘な國家主義に偏傾し、爲めに學校教育の場合に於て生徒の方では「又か」と云ふ樣な感じをもつ、或は國民道德の話を聞くとウンザリすると云ふて居る、そこで學校教育に權威の欠けて居る狀況が極めて明かに認めらるゝのであります、斯かる狀態の中に於てこれ等各々の主義を適當に調節して中心を立つる必要が切實に感ぜらるゝのである、所が日蓮上人の主義は確かに此の要求を充たす所のものである、第一個人主義の長所に就ては、日蓮主義に於て之を併有して居る、個人主義の長所は、一、自己の力量を自覺する事二、他人の人格を尊重する事であるが、上人位自分を大きく見て居らるゝ人は他にあるまい、其の適證は本尊に認められて居る御名である、昔から人の禮拜する佛畫本尊等には遠慮て、筆者の名を記さないのが普通である、然るに上人は本尊の中央に日蓮と自分の名を記し、然も極め

て大きな字であつて、それに鎗の子の様な書判が書いてある、斯かる事は古今に類のなきことであります、又御遺文を拜すると、至る所に日蓮が日蓮がと仰せになつて居る、書物にあの位お書きになつたとすれば、上人が御説法の光景は、定めし大きな聲で日蓮が日蓮がと何回となく仰せられた事と推察せらるゝのである。

『閻魔法王の御前にても日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那と名のりて通らせ給ふべし』

閻魔法王の前でも日蓮の名を名乗りさへすれば、冠を脱いで通ふして呉れると云ふ、強い確信を發表せられて居る、而して今日の個人主義とは全く異つて弊がない、今日の個人主義は自利中心である、つまらない事に騒いで喧打を初めたりする、喰ひつぶしの個人主義であつて弊害極りなきものであるが、上人のは堂々たる人格尊重である、故に一切衆生には佛性を認めて不輕菩薩の跡を繼ぎ、進んでは一切衆生の一切の苦を受るは日蓮一人の苦なりとの大精神となつて來るのであります、又國家主義に就て考ふるに、國家の最も大切なるは何であるか、人間一人に就て比例するも、人其の者は現實生活に執して、即ち金錢とか肉欲とかを滿たす爲に存在する者とすれば、國家の任務も國民に利益と幸福を與ふればそれで足るのであるが、若し國民擧つて現實の欲望に沒頭するならば、其の國民は低き生活を爲せるものと云ふべく、金錢肉欲等は吾人生活の目的より見れば副現象である、吾人は知情意の全き滿足を得ざるべからず、其爲には國家は國民の品性を高め、益々高等の文明を發達せしめて、以て國民の知情意の高等なる滿足を得せしむべきである、然らば國家の最も尊重すべきは宗教道德であると云はねばならない、然るに現今の日本國は、國家主義の最大要件を忘却せる人が多數である、宗教の問題は不問に付し去り道德に就ても高等なる方面を逸し去つて居る、國民の思想を高き文明に進むべきを欠いて居る、只國民に向つて國家に盡せとのみ要求するの嫌がある、丁度其の有様は、娘を醜業婦に賣り拂つて、婆さんが左團扇で

贅澤をして居ると似て居りはせぬか、斯の如くに誤つた國家主義を力説する爲に、學生が今の國民教育の感化に心服しないと云ふ不祥なる現象を呈するのではあるまいか、故に國家は國民の知情實を滿足せしむべく經綸せられねばならぬ、國家はかゝる立派な精神を以て國民に臨まねばならない、然るに現今の國家は敵國を侵略して殖民地を占領し、其の分け前を得て國民に金錢の慾望を充たしてやる位が關の山である、丁度爺が盜賊をしてウント金を有つて歸り、平素から家庭の事を少しも心配しない、不平を云つて居る女房や小供に、一ッカミづゝ金貨を分配してやるからグッ〳〵云ふなと云ふのと同じ有様である、國民に高き文明を施す事を考へない、其の爲に個人主義と國家主義とが衝突するのである、この狀況は少し高き識見を以て見來れば直ぐ分ることであります、然るに日蓮上人の國家主義は、先づ以て正法を立て、道に依て日本の天職を發揮し、而して最後に世界を照さんとするものである、故に上人を通ふして國家主義は初めて全きを得るのて、日蓮主義的國家と云ふだけて、現代の疾を救ふに足る力ありと確信するのであります、兎に角現代の思想界は日蓮主義の勃興によりて之を救濟せねばならない、而して其の爲には、先づ以て日蓮主義者の惰眠を覺ます必要がある、惰眠を覺まし潑溂たる精神を以て、日々迫り來る社會の要求に對して適應する働をさせねばならない、之が爲に先づ以て各教團の統合を促がし、以て外部の要求に添ふやうにせねばならぬのであります、單に思想界のみてない、今日は日本大に大なる覺悟を要する時機である、日本は世界的に發展せねばならない、日本人は今迄の考と一變し、大に勤勉努力の精神を養はねばならないが、其の爲には先づ日蓮上人を了解せしむべし、上人の如き強き覺悟と力量とを與ふべし、然して上人の強き力を現はす基となるものは精神的の慰めである、勤勉の前には充分なる慰安と必要とするのであります、所が現今の日本に於ては生活難の其の度を加へ來つて、殆ど努力に對する慰安を與へられて居ないのである、さればもを一層の勤勉

努力を要求するには、更に不平の起り易い惧がある、併しそれは物質の上に報酬を求めんとするから不平が起るのであつて、道徳信仰の高き方面に向つて求めしむれば、直に解決し得らるゝのである、凡て人間の事は道徳宗教の精神を尊重せねば圓滿には行はれない、人間が眞正に働らいても其の報酬を得られない場合に之を宗教の側に求めてそこに強き慰めを得んとせば、日蓮主義の必要が切實に感ぜられるのである、上人は佐渡の雪中に其さに辛苦を嘗めて少しもお弱りにならない、其の他上人御一代の事蹟は凡て道徳宗教の光に生き如何なる悅に滿ちて居られたかゞ明かである、そこに日蓮主義の發揮を必要とする所以が存する、一般の宗教に依つても一通りの慰めは得らるゝが、これには注意を要する、釋迦牟尼が仰せになつて居る、印度は暑い國であるから池に浴して汗を流すと善い心持になる、然し池に毒龍が棲んで居つて、浴する者を喰ふとすれば、再び其池に浴する事は出來なからう、宗教の信仰に依つて善い心持になる一通りの慰めは得られはするが、然し信仰其ものゝ中に、毒龍が棲んで居つたならば何とすべきか、天理教の如く夢中になつて信仰して居る、何時しか財産を濫費して了つたと云ふ事がある、教が本格でないと斯かる弊害を生ずるのであります、何うしても日蓮主義の健全なる信仰に依る悅びでなければならぬ、宗教の悅の中には色々の欠點が存して居る、或は我建國の精神と衝突するものもあり或は厭世悲觀の弊を伴へるものもあるが、日蓮主義の信仰に依てのみ、一方に慰安と一方に強き力と覺悟が得らるゝのであります、現今日本人が新しき覺悟と活力とを必要とする時に際しては、日蓮主義の勃興を歡迎せねばならないのであります。

更に內部より起り來る統合の必要は、一には教育機關を完備して善き僧侶を養成しなければならない、然るに今日の如く各教團に分れて居ては、其の目的を達する事が出來ない、もう一つには日蓮主義發耀の上に於て各教團協力の必要が起つて來て居るのであつて、既に天晴會の如きは門下共通の力に依て、多年經營し

來り各地に支部も出來、各教團相互に連絡一致の行動を取つて居る、內部の必要は主として教育及布教の方面でありますが、今一つは內部を刷新して惰眠を覺す必要がある、若し現狀の儘に捨て置くならば、段々各教團內に區々たる小さな爭の方に這入つて行き、小さき事情小さき考からクダラナイ事を存續して行く、統合の運動が起れば一方にツマラない喧嘩が消滅し、一方には僧風をも刷新せらるゝ一舉兩德であります、尙檀信徒の上にも統合の必要がある、現今の日蓮主義の檀信徒は寺といふ考のみ殘つて、上人の主義發揚に力を盡す護法の精神が殆ど腐れて居る、お寺の雨漏りは心配するが、教の雨漏りは意に解せぬ、お經には護法といふ事はあるが、護寺と云ふことはない、斯かる不心得は日蓮主義の檀信徒の中に有り得べからざる事であり、之を覺醒せねばならない、そこにも矢張り何等かの驚きを與ふる必要があり、又各教團今體を合すれば、そこに自ら先覺者の間に意思の疏通が出來、其中から此の護法の精神が起つて來るであらう、之が非常に大切なる點であります。

三、統合の機運

日蓮門下の教團が斯く分裂して居るのは、主義の上に於て誤つて居ると云ふ事を申しました、又之を統合すべき必要が迫つて居ると云ふ事は、社會の方面から起る要求と、それから教團の內部から起る要求との二方面よりして、統合の必要は迫つて居るのでありまして、其必要の迫つて居る所に統合すべき機運と云ふものが、茲に熟して參つて居ると思ふのであります、或る人の如きは、統合は既に後れたと云ふことを申されますが、それは議論の立て方で、無論最初から分裂することが間違つて居るのであります、から統合すべき機運と云ふものは、何時の時代にも作り出せば在つたものではありませうけれ共、併し今日まで統合が出來なかつたとすれば、機運到らざりしものと云ふより外はない、機運はあつたけれ共やらなかつと云ふことは是れは一箇の觀察だと思ふ、事實實際今日まで統合さ

れなかつたのは、機運の然らしめたものと云ふより外はない。

又一方には未だ機運は到つて居らん、今後三十年若は五十年の後には、さう云ふ機運が來るかも知らんけれ共、今日は未だ機運ぢやないと云ふ考へを持つ人もある、それには何ぞ根據があるかと云ふと、唯々さう云ふ想像を抱いて居るのである、何故今日機運が熟して居らぬかと反語すれば、何の答も無いのである、唯ナカ〳〵未だやれまいと云ふ樣なことを考へて居るのであつて、一向價値の無いことであらうと思ふ。余輩は今日正に機運熟せり、機運到れりと云ふことを確信して居るのであります、何を以て之れを證明するかと云へば、第一には近時日蓮主義が勃興して參つて居る事柄であります、即ち世の中に日蓮主義を歡迎する者が非常に多くなつて來たことに於て、其の日蓮主義の勃興の機運なるものが、即ち一轉して各教團の統合を促がす機運を產み出したものであると信ずるのであります、是れが日蓮主義が日に月に發頭して行くとか、世の中から顧られないと云ふことであれば、其の働きが鈍つても、其の教團が沈滯して居つても、それて淸みまするけれ共、實際今日世の中より日蓮主義を迎へる者が各方面に多くなつて參りますれば、それに對して適當なる働きを全ふするには、此の儘ては出來ないと云ふことの自覺が玆に起つて來たのである、モウ少し具體的に云ふならば、我國の思想界に於て、日蓮主義の如き堅實なるものを歡迎して參り、相當識者の間に認めらるゝに至り、熱烈なる要求者はあらざるにもせよ、日蓮主義が宜からうと思ふから、一つ研究をして見たい、若し聽き得られるなれば、大聖人の主張を聽いて見たいと云ふやうな考を持つ人は頗る多數あることと思ふのである、又青年學生の間にも、今日は精神修養が大切だと云ふ自覺が起つて、同じ修養を積むならば何をやつたら宜からうか、どうも儒教ばかりの道德論でも根柢が淺い樣に思はれるし、又信仰力も乏しい樣に思はれるから、我等が根柢ある修養を積むには宗教に起かなければならん、其の宗教としては何れ

に依るべきであらうか、基督教に依るとしたらう、あれはどうも淺い所もあるやうだし、又我國の國風に合はぬ所もある、どうも基督教の道德論は片寄つた所があるやうである、斯ふ云ふことを一寸した人が考へる佛教の方に依るがよいと斯う考へるのであります、其の佛教は華嚴に依るか眞言にしやうか、禪か淨土かと考へる、禪宗も宜からうとは思ふが、此の頃は日蓮主義の聲が高い、同じやるのなら日蓮主義に行つて見たい、能く分らぬけれ共日蓮主義に赴かうと云ふ考へが學生の間に起つて居ると思ふ、其の證據は東京の帝國大學内にも會が出來て居り、第一高等學校にも會が出來て居り、高等商業學校東洋大學にも會が組織されて居る、其の他天晴會が各階級の人々が集まつて熱心なる研究を繼續して居る、さうして此の會の東京に起つた以後、別段擴張を計らないが、唯同志の人が寄つて居つたのでありますが、各地に天晴會支部が起つて來て居る、而して日蓮主義の淸新なる團體が全國を通じて百八十餘に上つて居ると云ふ事があります、三四年來新たに起つたのである、それが皆な熱烈なる研究者、擁護者であります、さうして今後續々と起つて來るのである、此の如く日蓮主義に對する要求は、勃然として我國に起つて居るのであります、其の結果としては、さう云ふ新らしい研究の會に於ては、從來分派の間に爭うて居つた樣な枝葉の事、末の末に亘つての事柄を聽きたがるのではなく、何れも堂々たる大聖人の御人格と御主張に向つて要求を有つて居るのである、舊來の註釋から註釋を辿る樣な死んだ研究にあらずして、社會に活動しつゝある所の人々が修養の資糧として、日蓮主義に依つて活動の原動力なり要素なりを養つて、此の社會に活動をやる光と力とを得たいと云ふ要求であります、舊式の教育を受けた者が之に當つても、大抵は此等の研究者を滿足せしむることが出來ぬ、この新要求に應ずべき能力を養ふ爲に教育方針が立てられべきであり、この方針に依つて活動すべきである、されば此の要求に應ずるには如何にすれば宜しいかと云ふ事よりして、統合を促がす機運が熟して

参つたと思ふのてあります、それは統合さへすれば直ぐに人物が出來るかと云ふと、それは一概には云はれませんけれ共、先づ以て此の統合の變化に於て、從來の惰眠を打破る事にせなり、又小さな事に局蹐して居つた尚僂見たやうな考に改正を促がし、伸び〳〵した量見にもなつて來るてあらうと思ふ、其の伸び〳〵した間から計畫されることが、布教の方針ともなり、學事の方針ともなつて、布教學事の方面に於て、今後の活動が社會の要求に適合する樣に導かるゝてあらうと思ふのてある、又さう云ふ希望が内部の各教團の志ある人々の間に漲つて來たのが、今日の狀況てあります、無論その居眠りを續けたいと考へて居る人も少くはありますまいが、併し大上人の御精神が全く滅びては居りません、必ず一點の閃と云ふものは滅びないてあらう、此の儘ては相濟まんと云ふ考は、夫等の人〳〵も持つて居ることてあらうと思ふ、其處て志ある人々から此の統合の氣勢を揚げて來れば、敢てさう反對をすると云ふ迄のこともなからう、蔭てブツクサ云ふ者はあるに相違ないけれ共、さう云ふことは何時ても在るのてあります、蔭てグズグズ云ふ者があつてもそれは統合の機運が來て居らぬと云ふことの證據にはならないのてある、又何時の時代如何なる事柄に就ても、少しく意味のあることをしやうと思へば、これ等の人のグズ〳〵云ふのは是れは免かれぬことてあります、それに依つて統合の機運の熟して居る、熟さないと云ふことを判斷する根據にはならぬと思ふ、兎に角統合の機運の熟して居る證據は、此の統合の計畫をいたしましたのは本年の十月二十二日てあります、小泉管長と阿部管長と私と三人の間に、先づ今日の機運を逸しない樣に、統合をやらうぢやないかと云ふ相談をいたしまして、何れも意見が一致いたしましたから、三人が統合を促がす所の意見書を作りまして、之れを他の教團に發送いたしましたのてあります、二十三日を以て意見書を發送いたしましたのてありますがさうして回答が纒まりましたのは即ち十月三十一日てあります、尤も早いのは二十三日に出しまして即日贊同の回答がありましたのは本妙法華宗てあります、それから二十七日に贊同を表しましたのが本門法華宗てあり、それから十月三十日に贊同を表しましたのが本門宗と云ふ元の富士派の分派、富士の西山本門寺、北山本門寺、京都の要法寺、房州の妙本寺と云ふ四箇の本山が聯合して形作つて居る今の本門宗、それから今の法華宗と申すは越後の本成寺、京都の本禪寺の一派是れは十月三十一日を以て贊同を表されました、全部の贊同を得ましたのは話を始めましてから一週間てあります、斯う云ふ大事が一週間に於て各教團の責任者管長が贊同を表せられると云ふことは、實に統合の機運が熟して居る所の最も明白なる一大證據てあると私は信ずるのてあります、さうして本月二日を以て在京管長小泉師と私、それから在京の各教團の宗務當局者が相集りまして、さうして愈々統合の決議及び宣言その他の申合せを致しまする爲めに、何處に寄つてどうしやうと云ふ打合せをいたしました、當時一人の異論もなく打合せが出來ましたから、一週間の後即ち本月八日午前十時を以て池上本門寺に集ることに致しました、それて一方には御門下僧俗の懇親會を開催したいと云ふ計畫が起りまして、七教團の各宗務を統轄して居ります人々が發起になりまして、それに矢野茂、山田三郎兩氏が加はりまして、九人の發起人て僧俗の有志者に書面を發しました、さうして豫定通りに池上に集まりまして、決議宣言及び申合せをいたし、豫定の通り懇親會を開催したのてあります、其の時の宣言は雜誌にも出て居りまするが、要旨は此の儘ては日蓮主義を世界に發揚することは覺束ない、どうしても統合をするのが祖師の御精神てある、時運の赴く所に隨つて、斯うなくてはならんと云ふことの宣言を致しました、又決議と云ふのは

一、我が日蓮主義を奉ずる者は大聖人の聖旨に從ひ、時世の赴く所に隨つて各教團の統合歸一を實現する事。

二、外に向つてする布教、内に向つてするのてなくし

て對外的の布教、その上では最善の方法を以て各教團の間に聯絡一致の行動を取り、又子弟の教育機關に就ては適當なる研究を積んで、今日の制度を改良する事。

三、之れを實行する爲に各教團から責任ある交渉委員を撰出して、此の目的を貫徹する事。

是れが決議の事柄てあります、さうしてそれを實現する附帶事項を一々申合せを致しまして、先づ以て準備委員會を開き、交渉委員が出て來る迄の原案を作り一切の運びを採らうと云ふことになりました、其の後全部準備委員が出揃ひまして、七教團から十七人出まして、第一回の準備委員會を本月二十四日に、第二回を二十七日に開催を致しました、さうして統合に關する所の調査方針と云ふものは、どう云ふことを調べて、どう云ふ工合になさうと云ふことの打合せをいたしました、其の調査方針書と云ふものは、先づ以て充分に出來上つて居ることゝ信じます、第二回に於て大體の主もなる事の意見を打合せをいたしましたが、何等の衝突もなく全會一致て纏りまして、今日は各部門を分けて其の調査を繼續して居る次第てございます、其の部門は六部に分れて居ります。

第一　教義部
第二　制度部
第三　布教部
第四　學事部
第五　經濟部
第六　雜事部

此の六部門に分れまして、十七人の準備委員が分擔をいたして、さうして今日は着々と此の調査研究を進めて居る次第てあります、それて今後どうなるのかと申ますれば、十二月十四日迄に各部の大體の意見を作り上げまして、第三回の準備委員會に提出する、其處て第三回の準備委員會に於て大體の協定をいたしまして、退いて各部に於て愈々正確なる意見書及び法案を作りまして、來年の一月十日迄に全部原案を脱稿致し尚ほ念の爲めに二三回の準備委員會を開催いたしまして、一月中に各派から選出される處の交渉委員に原案を交附いたし、二月十日から二十日頃迄の間に、此の問題は各教團責任を以て決議することに相成る事と思ふ、無論其の中にはイロ〳〵面倒な事柄もありますれば、即決の出來ぬこともございませう、斯の如く順潮に運んて行くと云ふことは、統合の機運が熟して居ることを事實に證據立てゝ居ると思ふ、數百年間分かれて居つた教團と教團とが寄つて、斯かる重大なる事柄を斯くも順潮に着々と運ぶと云ふことは、眞に不思議な現象と云はなければならぬのてある、斯の如く進み行く其處に機運の到れることを明かに證明して居ると思ふのてあります、唯だ無責任なる者が、蔭てグズ〳〵云ふことは、取るに足らんことてあります、さうして一方には未だ具體的に現はれて居りませんが、仄かに承はつて居る所に依ると、此の東京を中心といたしまして、日蓮主義を敬慕し確信して居る所の在家の方々の間に、熱心に統合事業を援助する目的を以て、後援會を組織せらるゝ都合に運んて居ることを承はつて居る、恐くは今後二週間を出てずして、世人は其の發表に接することてあらうと思ふ、其の結果は先程申ました全國に亘る百八十餘の日蓮主義の團體は、此の後援會に呼應いたしまして、東西南北轟の應ずるが如くに蹶起し結合の聖業をお援けする事と思ふ、是れ即ち機運の至れることを證據立てゝ居るのてあります、故に機運到れりと云ふことに就ては、一點疑ひを存する所はないと信じます。

四、統合の實力

次には統合の實力と云ふことを少し申上げて見たいのてあります、折角機運が到來致しましても、其處に人物が居らなければ好機を逸し去るのてある、所謂グズ〳〵云ふて居る者ばかり上から下まて一杯になつて居りましたなら、どうしても統合の目的を達することは出來ないと思ひますが、七教團に於てはそれ〴〵の考へを持つて居る人が現にあると信ずるのてあります、物は見やうてございまして、詰らん奴ばかり寄つ

て居ると斯う見れば、さうも見えぬことはありますまいけれ共、併し今の坊さんは假りに詰らんとしても、日蓮大上人の大精神が滅びない以上は、日蓮門下の人々の頭腦に刺戟を受けつゝあり、どうしても斯の如き問題が起りました上は、情眠より覺めざるを得んと云ふ力、即ち大上人の威力、滅びざる大上人の大精神が起つて參りまして、各教團の人々の頭腦に力を與へ呼び起し下さることを信ずるのである、事が起らんければ皆眠つて居るかも知れませぬけれ共、一つ斯う云ふ問題が起りますと、どうしてもさう情眠を續ける事は出來ぬ樣になつて來ると思ふ、現に自分共が承知して居ります所では、各教團の管長方に於ても、殆んで同一なる自覺と、同一なる熱心と、同一なる責任を以て此の事に當つて居らるゝことを見受るのであります、又七教團の準備委員として出られて居る十七人の方々を見ましても、お互に斯う云ふ時勢に統合の大事業に携はることを得たのは、實に過分の光榮と云はなければならぬ、心血を注いで此の事業の成就するやうにしなければならんと云ふことを誓約をいたし各々血判して此の事業に從事されて居ることを承知をして居ります、局外の或者が嘲けり見て居るやうな不眞面目不熱心のものではありません、斯の如く各教團管長の決意と云ひ、又準備委員の至誠と云ひ、必ずや此の聖業を成し遂げるだけの力が其處に存して居ることを認めるのであります、又それはかりではありません、其の教團内に於ける僧侶が悉く此の事を理解しないものはない、私は大多數今日の機運に當つては此の結合を決行しなければならんと云ふ自覺を持つて居ると思ふ、他の教團のことは詳しくは存じませんが、私共の教團に於ては此の統合の事が起ると、逸早く報告をいたしまして、全國の宗會議員とか管事とか或は地方の學林とか、其他布教師であるとか、それ〳〵の人々約七八十人の有力なる人の許に大體の意見を照會いたしました、處が一人も反對を申出でた者はございません、私は腹藏なく思ふ所を云ふて來いと云ふ書面を添へて發送してありますが、今日までに質問書を寄越

した者が只一人、其の他は全部大賛成を表して居るのでございます、又是には他の教團の事柄でありますが、或は臨時宗會を開く計畫をなさるのも二三あると承つて居ります、多分宗會をお開きになつたならば、此の聖業に對して反對の決議をされる樣なことはあるまいと思ふ、然樣な愚なる事を天下に表白する教團は今日はないと信じます、して見ますれば各教團の人々の間にも、必ずや此の統合を成し遂げるだけの人物があり、熱心があり、力があると云ふことは今日の實狀と云はなければならぬ、さうして此の統合の結果仕事が出來る出來ぬかと云ふことに就ては、それは物は比較の取り方でありますが、小さく是れが七つにも八つにも分かれてやつて居りますのは、教育機關も振ひませず、布教をやるにしても小さなことを内部で爭ふを止めて、廣く天下に向つて活動を起すと云ふことになりますれば、布教師の上に於さましても各教團から適切なる者各十人位選んで、七十人の人が聯絡一致して布教のことに當る事となり、學校經營に致しましても、或は教師を選ぶ上にしても、費用を辨ずる上から見ても、色々都合の宜いことが起つて來ると思ふ、それに就ては多少變へなければならんことも起きませうけれ共、其の利害の上に害を引去つて、利益が多いと思ふ、どうしても統合を致しませんければ、日蓮主義發揚の上に於て不利益であるは爭ふべからざることであらうと思ひます、尚ほ在家の信者、檀家の方に就て考へても、日蓮主義の感化を受けたる檀信徒は、何處までも大聖人の御聖教を世の中に弘めやう、さうして一天四海皆歸妙法の曉に達しやう、己れが信ずるばかりではいけない、之れを他に及ぼして行かなければならぬと云ふことは、日蓮主義の檀信徒たる者の第一の心得であります、であります、どうしたなれば此の教が盛んになるだろう、如何にしてお祖師樣の教を廣布しやうと云ふことは、檀信徒の胸に日夜離れない事でありませう、これ等の人々は統合に對して歡喜を以て之を迎へると思ふ、互に分れて小さな爭ひをして居つては目的を達し得られないと云ふ自覺を以

て、頑迷固陋の者とか、無智文盲の者、信仰の廢つて居る者は兎も角、一人前の常識を有し、一人前の信仰を持つて居る者であつたならば、斯う云ふ計畫に對しては何等かの力を捧げて、此の目的を貫徹したいと云ふことで働き出すものであると私は信ずる、其の力が集つて來て統合を成就するのである、日蓮主義は幕府の政治に依つて壓迫されて居つたが、今日は王政復古の御代となり、思想界には日蓮主義勃興の機運に向つて居る、此の場合に是非廣宣流布の大願は貫徹しなければならんと云ふ自覺が、檀信徒の中から起り、志ある僧侶と相應じて、以て此の統合の事業を完成するに至るであらう、私共の眼から見れば、其の時機が此處に現はれて來て居ると思はるゝのであります、であるから實力の上に於ても嘲けつたものでない、僧侶が何か出來るか、檀信徒か何か出來るかと冷笑するなど、さう云ふ考へを持つ者は日蓮主義者でないと斷言して宜しい、少し面倒な故障でも起りさうであれば、様子を見て反對の側に立ち、無責任の批評をする様な者は、決して眞の日蓮主義者ではありません、多少の困難に遭遇致しましても、又グズ〳〵云ふ者が多少あつても、そんな事を眼中に置く必要がない、其の妨害を排除して進んで行くべきであり、又其の實力が存して居ると思ふ、此の點が今回明かに各教團の志士の間に決心されて起つた大運動であります。

五、統合の方針

統合々々と云ふてどんなことをするのであるかと云ふことは、多くの人の疑問であらうと思ふ、是れは私一個の考へではありますが、併し準備委員會の方針をも承知をして居りますから、今日は個人で申上るのではあるが、統合の當事者の考と全然關係の無い事柄ではありませぬ、私が一個の統合私見を簡單に申述べますれば、此の六部門の。

第一教義部　のことは無論此教義信仰を捨てゝ統合をやるなどゝ云ふことがあつては、害あつて益の無いことであります、教義の問題は十分之を尊重して、さ

うして此教義の分裂を一掃すると云ふことに盡さなければならんことは無論であります、併ながら此教義を統合歸一いたしまする方法に就いて、どう云ふ道を歩行んで行くのが適當であるかが問題であります、教義を打捨てゝ統合をやると云ふことは、決して在るべからざることで、然樣なことを論ずるは無用なることである、主義を捨て、教義を捨てゝ統合する樣な愚なことを考へるものは、各教團を通じて一人も在るべきものでありません、又教義の問題が六かしいから統合は出來ぬと云ふ人がありますが、其は教義の研究が足らないから其う思ふのである、又其人は今日の機運をも知らないのである、併ながら此統合に就て如何なる方法を取るべきか、如何なる道を歩むべきかと云ふことは尤も重要なる問題である、委員會を開いて「マア豆腐で一杯呑んでよい加減に譲り合ふてはないか」と云ふ樣なことが解決され可きものではない、そんなら一々論議を重ねて決議さるゝかと云ふと左樣な譯にも行くまい、故に一概に出來ぬと云ふも直ぐやれと云ふも俱に調ふた議論でない、この南説は眞實此の教を盛んにしやうと思ふ眞心から出て居る議論として見ることは出來ないのであります、眞正に此の教の統一を圖る方法は教育機關を通じて、次第に接近を圖り又布教の方には對外的布教に於て聯絡一致の行動を取つて進むべきである、兄弟相爭ふは大上人の遺訓に背くから、目下差迫つて居る外部の要求に應ずるを先にして、前にも申す通り内部で爭ふて居る教義は後に廻はし、對外的發展を試みつゝ、其處に意志の疎通が段々と出來て來るであらうと思ふ、故に先づ學校教育の方に於いて段々聯絡を取り、そうして教師間に互に教義の理解を交換し、其處に一致したる點が幾個も出來て來ますから、最後に殘る問題が一つとか二つとかになつた時、それをどう云ふ方法にするかとの決定を試むる時分には、同じ學校で教育を受けた者同志であるから適當に教義の統一を完成することが出來ると思ふ、尤も六づかしいことはありますが、誠心正意事に當りますれば、元と流れ出てたる法水の源が一つであり、法華

經の教を元として、日蓮聖人の主義を元として起つた教團である已上、法水一源なれば是れが統合せられぬことは斷じて無いと考へます、それでありますからこれは決して空想ではない、必ずや余輩は今日を端緒として第一の教義部に於ても、我々の生存の内に立派に統合が完成すること〻信ずる、それは中にはチットヤソット分らんことを云ふ者もありませうがそれは次第に了解して參るてあらう。

第二制度部　統合の後はどう云ふ制度を採るかと云へば、是れは今日の樣に分立して居るは面白くない事てあります、宗制とか制度とか云ふことは一にしたいと云ふ希望を持つて居るのてありますけれども、是れは直ぐ住職任免の問題に關係をして參りまする、利害關係が直ぐ其處に反んて參ります、故に制度のことは餘程宜く調査をしなければならん、制度の統一を先きにしやうとすれば統合事業は失敗に終ること〻思ふ、制度の統合に就いては適當なる調査機關を置きまして、十分に年月を重ねて愼重に調査をする、必ずしも制度の事を三年や五年てやらなければならんことはない、在來の通りに持續して置いて、寺の住職任免は元の儘としまして、常設されてある制度調査委員に於いて研究を重ねて、適當なる案を研究しつ〻進んて行くやうにして最後に回はして構はぬと考へて居るのてあります、どうしても慾には惑ふものてあり、そう云ふとは色々紛擾の種てあるから、今後の統合には重きを置かん方が宜からうと考へて居る一人てあります、けれ共之を除外して仕舞ふことは出來ない、例へば獨逸の聯邦制度の樣に七教團は宗務院なり管長なりを置いて、更にそれを統轄する處の統合の總理府と、聯合管長を置きまして、或は評議員制度を採るか、適當の方法を以てやれば出來んことてはありません、けれ共聯邦的にするが宜いか、各教團相互に獨立して居るがよいか、或年月を以て十分に研究を積んて、七教團の人々が隔て心なく、不平なく、合したが宜ろしいと云ふ機運の來た時を以て、一つにするが宜いと思ふ、私は此の制度の問題は、後に回はしたいと考へて居るのてございます、

第三布教部　是れは一刻も止めることの出來ない、即刻實行せなければならん問題てあります、統合に就いては一番に肝要のことは布教の聯絡てあります、布教と云へば非常に廣いのてありまして、唯公衆を集めて演說說教をするばかりてはありません、例へば軍隊の布教などに就きましても、日蓮主義は大歡迎をされて居るのてあります、到る處の師團に於ても適當なる講師を聘して講話を聽きたがつて居るが、ナカ〳〵適任者が澤山にはございません、それが軍隊ばかりてはない、各方面の精神講話、精神修養が熾んに起つて參りまするから、ナカ〳〵此の布教の方面は人が不足てあります、てありますから布教の方面は一刻も緩ことは出來ない、それて第一に七教團の中より相當なる人を選んて組合を造り、七組か十組にいたし、第一組は東北、第二組は東海道、第三組は山陽道、第四組は九州と云ふ風に、各教團の第一流の人々を組合せて、全國に向つて大擧傳道を試み、來年の四月から始めるか九月から始めるか、各教團の有力者が結合して大活動を起し、世論を喚び起して大發展を圖る考てあります。

尙ほ布教に就いては、從來は各教團の寺院より支出する費用を以てやつて居るのてあります、唯僧侶の御布施から產み出す所の金を以てするだけては、充分の活動が出來るものてない、熱心な檀信徒の力に俟たねばならぬ、それが外護の本分として當然の事てある。

故に進んては將來社團法人より財團法人なりを作つて、僧侶一致して布教部の根據を拵へたい、從來の寺院の支出のみによるのは間違つて居る、矢張在家の檀信徒と、僧侶と力を合せて活動する方法を研究したいと思ふて居ります、私の理想では、布教には各教團の宗務院の外に布教機關を設けて、是れに全國の檀信徒の力を結合せしめて布教費の根據を造り上げたい、而して其處から布教員を派遣することに致したい、布教に熱心な檀信徒も多いから、必ずや布教部の法人團も出來得ると信じます、唯だ費用だけてもいかんから

布教に適したる人には布教適任證を與へて、九十日間位東京に集めまして、今の言葉で云へば大講習會を開いて、皆其處に集めて現代に活動する智識能力を與へる樣にしたい、其の學科等の事柄に就いても、唯だ古臭いことばかりやつて居つてはいかん、當代の活學問、思想界に立つて充分なる働きの出來る者を作り、現代を救ふて適當せる宗教家を作る樣に致したい、それには東京に於て大講習會を年々九十日位開いて、新しい智識を與へる考へてござります、必ずや此事も實現せらるゝ事と思ひます。

第四學事部　學事の方に於ては、教育機關のことは細かい調査を要するのであります、必ずや是れも出來上ることゝ信じて居る、此の學事のことは七教團共心配して居るから、一個の成案を作り得るものであらうと思ふ、既に統合上學事は最善の方法を立つると云ふ大體の意見を疏通したから、準備委員會に於て一個の成案が出來上ると云ふことを茲に報告して置きます。

第五經濟部、經濟のことに就ては、是れも七教團相合して經濟を立つる事も困難はない、互に費用は少ない方にしやうと思ひまして、統合と云ことにすれば、さうシミッタレたことも云はれないであらう、必ず是れも宜い方に進むことになると思ふ。

第六雜事部　雜事に就いては種々と氣付いたこともあるが茲に申上げる程の事もありませぬ。

之を要するに、此教義、制度、布教、學事、經濟、雜事の六部門、何れも面倒は無いと信じて居るので、統合の方針を能く理解さへすれば、統合計畫は斷じて無謀の事ではない、何も出來ないことをやるのではない、確かな見込があつて着々進捗して居るので、前途寔に有望な事と思はれる。

六、統合の効果

統合すればどう云ふ事が現はれて來るかと云ふに、現在よりは在家も僧侶も皆力を新たにして日蓮主義の發揚に盡すことが出來る樣になる、其の結果國の爲めになり、人生の爲めに日蓮主義の本領を全ふして、廣

宣流布の大願に力を副へ奉つることになるであらう、統合は決して意味の無い仕事ではない、今にして統合を決行することは、日蓮大上人の御主義の爲めに、又國家社會の爲にする神聖なる事業の一であると思ふ。

七、統合の辯妄

統合に關して種々な妄評を試みて居るものがある、斯う云ふ批評が起つて居る、各教團が教義の統一の出來ぬ内に一緒になつて働くことは誘法である、誘法は日蓮主義に於て一番恐ろしい罪に成つて居る、斯う云ふことを云ふ者があります、考へ樣によつてさう云ふ風にもなりませうけれ共、日蓮大上人の云はれた誘法の意味を能く考へないから起る速斷で、誘法の根本は法華經の教へが世の中に廢つて行くことを意とせないのが一番の誘法であると思ふ、其の教を旺盛にする計畫を指して誘法であると云ふは當らぬ、是は誘法ではない護法の大運動であります。唯だ誘法を口僻にして居つても教の衰へるのを知らないのが誘法の一番大きなものであると思ふ、誘法已上の破法に當る、其處に考へ及んだなら統合の計畫の如きは、それは護法の志が形に現はれた聖業であつて、社會の大勢に向つて主義の發揚を思ふ赤心よりの現象である、故に固陋にして此仕事に反對をする者が事實に於て不護法であり誘法である、さう云ふ消極論は我大教の發揚を害する所の陋見である、日蓮大聖人の御妙判に依つて立證するならば、如何なる事を誘法と仰せられたか、即ち此法華經の本義に背くことが誘法と云ふことになるのである、法華經の本義は統一主義であり法華の大教を以て一切の教を統一し、積いては全世界に此の教を輝かすと云ふことが、法華經の本義である、即ち無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしむるが主眼である、故に日蓮大聖人は速かに實乘の一善に歸せよと仰せられ、一切思想の分裂を打破つて大なる教の下に統一を期せんとするので、この統一の理想が即ち法華經の本義日蓮大聖人の御主義である、それが小さなことを爭つて、内部から分裂をすると云ふことは、是は統一の大

教に對して不忠なるものである、日蓮大聖人の法流は異體同心の力を以て行かねばならんと云ふことは、最も大切なる御遺訓である、之を一大事の血脈とも仰せられて居る、又我が弟子等は互に相毀るべからず、互に反目疾視してはならぬと遺訓されて居る、内に於て爭つて居ては決して外に伸びられない道理である故に對外的の觀念を喚起するがよい、例せば彼の政治家が政友會とか同志會とか、平素互に相反目疾視して居りましても一朝國家有事の秋は、對外的問題に就ては國民が一致する如く、教團の統一を圖るに就ては、先づ外的布教を盛んならしめ、社會の要求に對する適當なる活動を起して、日蓮主義の大發揚を爲すことが、今日に於て時節相應の護法の實行であらうと信じます、又統合を實行するには最先に教義の問題を解決して、正義の在る所に歸一せねばならぬ、然らざれば統合の意義完からず、然るに今回の統合方針はこの點に於て斷行の決意を欠けるものの如し、故に意義の完からざる統合なりと評する者あり、予を以て之を見れば、此の議論は純理想としては至極有理なれども、事實實際に於ては不可能の事である、若し强いて最先に教義の全部を歸一し、之を理想的に決定して進まんとせば、議論百出却つて反目嫉視の感情を一層高め來り、統合の實現は望み難きに終るならんと思ふ、從來各教團の分離せるは何れも自家の主張は完全にして、大聖人の聖統を繼承せりとの信念を有し、各教團をして自家の主張の下に歸一せしめんとするものであり、教義の全部を即決的に歸一せんとするは名は統合を期するにあるも、事實實際は從來の分裂の狀態を持續すべしと、ふと同じく、此の如き純理想論は畢竟して統合反對の主張に外ならず、是れ理想に偏して實際に迂愚なるの誹を免れないと思ふ。

又次に教義の全部は一擧にして統合し終るは難しとするも、各教團の間に共通せる契合點を捉へて其統合し能ふ教義を列擧し、次第に之を追加して行くを可とする者あり、此の論者は稍や實際に近き意見ではあるが、斯くして列擧し得たる契合點は頗る意義なきもの

に止まり、例ば七教團は法華經を以て依經とするとか、日蓮大上人を祖師として奉戴するとか、題目を信念口唱するとか云ふやうな事であつて、協定することの無意義なるを見るべく血して斯の如き契合點を列擧する事に於て、教義の權威を失ひ思想を浸潤に導き其處に鞏固なる信念と旺盛なる意氣とを喪失するならんと思はる故に矢張り對外的布教に於て聯絡一致の行動に出て、教育機關の統合に依つて教義の理解を交換し、漸次融合を實現する方法に由るを可なりと思ふ。

又次に各教團の統合に於て、教義に關する事を最先に決せざるを奇貨とし、雜亂勸請とか淫祠的迷信とか不正非行を爲しつゝある輩が、窃に安心して益々其の非を重ねるものありとせば、是れ其たしき謬見にして、其の心事は鼓を鳴して攻めねばならぬ、雜亂勸請淫祠迷信其の他の非行を革正して、大上人の御義に復歸すべきは統合の事の有無に由つて其の關係が異なる事ではない、此は各教團に協定を要する教義問題ではない、各自が反省して一日も早く正義の下に還元すべきは論なき所である、統合事業に於て直接此の問題を附議せずとするも、統合の精神中には從來の惰眠を覺醒し正義の信念を復活せんとの意氣を含有することは勿論なれば、不正非行を默認するものにあらざるは自から明なりと信ず、以上述べたる第一の統合事業を指して誘法と論ずるは、之を局量論者と稱すべく、第二の教義全部を即決的に歸一すべしと云ふは、之を理想論者と稱すべく、第三の共通せる契合點を協定すべしと云ふは、之を契合論者と稱すべく、第四の不正非行を默過すべしと云ふは、之を俗論者と稱して可なりと思ふ、此の局量論者理想論者契合論者俗論者の外に前段縷々陳述したる如く教義制度布教學事經濟雜事の六部門に亘りて秩序的に統合を進捗せんとする者は現在の統合事業の當事者にして、之を指して中正論者と稱するも敢へて過言にあらずと思ふ、予は中正論者に屬する一人として、旗鼓の間に堂々進軍せんことを覺悟せるものであります。

軍事資料

我陸軍の進歩

陸軍砲兵大佐　川崎寅三

私は軍人でも参謀とか副官とか云ふやうな、氣の利いた軍人ではない、其の代り明治初年十四五歳の頃から、鐵砲擔いで函館の戰爭に從ひ、之を初陣として其他日清日露等大概の戰爭には參加した、私共は雑軍の中に在つて籌策を廻らす方から、川を渡れ山を越へ突喊せよと云ふ命令を受けて働くもので、言はば軍人中の消耗品とても云ふべきものである、從て戰術とか軍略とか云ふ方面には暗いけれども、彈丸雨飛の間を日夜東奔西走したものである、て、私の從事した戰爭に就いて何かお話し申したいと思ふが、其の中日清日露兩役に關する事は少しく差支へがあるから避けなければならぬ、何故ならば其の當時の仇敵も、今は親友となりて互に手を握り合つて居る譯であるから、其等に就いて語るには憚る點がないでもない。又現下の歐羅巴戰爭に就いては、日々新聞紙の報道する所に依つて世人は知悉されて居ると思ふから改めてお話するにも及ぶまい、併し自分は明治維新前からの兵隊であつて空翔る飛行機や連發銃のやうなものは夢想だもしなかつた、極めて幼稚な我が陸軍時代から今日に至る迄身を軍籍に置いて來た者で、其間の變遷沿革を熟知して居る、往時の事は恐らく今の陸軍大學を卒業した立派な參謀あたりも御存じあるまいと思ふから、昔の珍らしい話を申し上げやう、中には稍滑稽に亘ることもあるが、それも自分が宜い加減に拵へた作り話でなく皆

事實ばかりである、唯我が陸軍の最初の有樣は如何なるものであつたかをお話するに外ならぬ、ナポレオンとか秀吉とか家康とか云ふやうな、古今獨歩拔山蓋世の英傑も子供の時から偉かつた譯でない、百戰百捷、勇敢宇内に比なき我が日本帝國の陸軍も、其の創設時代には矢張り隨分可笑なことが少くなかつた、今の完備整頓した軍隊とは雲泥の差である故に函館戰爭時代の軍隊の模樣をお話して現在と比較對照して貰きたいと思ふ、私は廣島と岡山の中間に在る備後の福山の生れである、丁度明治元年の十五歳の時には、既に兵隊になつて居たが、慶應より明治初年に至る間の時分は軍隊の編制が不完全ばかりでなく、國民の軍隊と云ふものに對する觀念も進んで居らなかつた、函館戰爭時代の索漠たる陣中生活に比べれば、後年の日清や日露の役では熱心な國民の後援があつたから、出征して居ても宛然御客に行つて居るやうな氣分がした、國民の後援と云ふことは、出征して居る將卒に非常な深い感動を與へ、眞心もて後援して呉れる祖國の人々を思ふては、國を護るの職に在る我々軍人は、身命を捧げて天皇陛下の御爲め又國の爲め盡さなければならぬと云ふ感想が胸の底から自然に湧く、それから戰地で趣味のない支那人の家などに起臥して、荒涼たる風物のみに對して居ても、祖國の熱誠籠めた後援を想へば泌々と言ひ知れぬ暖かい感じが起る、函館戰爭の時分には斯う云ふことは夢にも知らなかつた、其他交通機關でも軍器でも總ての設備が甚だ不完全で、今とは非常に相違して居つたのである。私は明治元年の十五歳の時既に兵隊であつたが、其の時分は十四五歳の少年でも、少し丈の高い者は兵隊になれた、私なども稍々丈が高かつたから砲兵であつた、尤も其の當時は大砲と言つても山砲と臼砲より外はなかつた、其の軍隊には十三四歳の若武者から、六十位の老兵迄、老若樣々の人が混じて居つて兵士の年齡が揃うて居ない、現今の佛國や獨逸は男子にして、苟も戰線に立ち得る者は悉く召集して居るから、矢張り甚だしく老若混淆して居ると云ふことである、デ、最初に和蘭式を採用し

次に英式となり、更に佛蘭西式に變つたが、一番初めはどうてあつたかと云ふに、未だ封建時代てあつたから大隊長などは藩の御家老樣が勤めることになつた、御家老などと云ふものは、御維新になつてこそ野原へ出たり練兵場へ出たりするやうになつたが、全體芝居て見るやうな肩衣を着て居て中に外へ出ないものてあつた、又外へ出る時には、家來を從へ槍挾箱を持たせて威張つて通る、我々が道路を横らうとしても、一町位先から御家老樣が來れば通行を差控へて待つて居なければならぬ、其の前を横斷することは出來ない、さうして直立不動て謹んて頭を下げて居ると、御家老樣の方は大きな顏をして行くと云ふ風てあつた、さう云ふ御家老樣が大隊長を務めるのてあるから、號令を掛ける事も頗る不馴れて、大隊長の傍には少し若手の教師が一人附添うて居た、此の御家老樣は偉い方てあつたけれども、大隊長として、和蘭式の號令を掛けるに就て、其號令の暗記が出來ないので、始終目に觸れ忘れないやうにと扇子へ書留めて置いた、所で、練兵場の先の方に紺碧の水を湛へた一つの池があつた、或日の事、御家老樣が兵隊の教練中一個大隊の兵士を横隊と爲し、池の方へ面せしめて『大隊前へ』と云ふ號令を下した、一個大隊の兵士は直に足並揃へて池の方向に進んだ、ズンズン進んて池の淵から僅か一間位手前の箇所に接近したが、幾ら待つても『大隊……』と云ふ號令が掛かつて來ない、止まれと云ふ號令がない以上はどこ迄もまつすぐに進んて行くべきてあるが、池が前にあつて見ればそこて止まらなければならぬのてあるけれども、實は大隊長どんな號令を掛けるかと思つてサッサと前へ進んて行つて今にも池の中へ足を突込まうとした、大隊長の御家老樣は氣を焦々させて居たがどうも號令が分らない、仕方がないから『大隊少し後へ下れ』と怒鳴つた。又或る時はザクザクと落葉を踏み碎いて森の中へ這入つて行つた、さうして草が脛を埋めるやうに生茂つて居る所て大隊の教練を行つた。聽て大隊長は『右に向きを替へ』と云ふ號令を下し、兵士は一齊に右へ向いたが『前へ』と云ふ號令に接しない

から前へ進むことが出來ず、面白半分に右へ右へとグルグル廻つた、御家老樣はと見ると大變てある、虎の卷の扇子を開いて目を白黑して所要の號令を捜さうと焦りに焦つて居るが、急けば急く程分らない、大隊長も今は幾分隊員の仕打があまりに自分を侮辱したものを感じたからてあらう、聽て『大隊……』と大聲を發した、偖はどんな號令が掛るかと一同耳を澄ました所、『大隊勝手に廻れ』と怒鳴り付けた、それから教師が之を聞付け宙を飛んて駈けて來て御家老を『マアマア』とばかりに取り鎭めた、斯う云ふ練兵の有樣てあつた、宛て嘘のやうだが實際さう云ふことがあつた、次に其の兵隊の服裝てある、五六十のお爺さんは昔の陣笠を被り陣羽織を着し大小を手挾む、そして其の大小を水平に腰に指す、又彼の江川太郎左衞門の發明した江川笠と云ふ觀世撚りて作つた編笠を被つて居る者もあれば、中には切り上げ髪て帽子も何も被らないものがある、今東京て稀に老人などが被る目ばかり出した頭巾を被つたものもある、且訓練が十分てないから、『右向け右』と云ふ號令があつても、右を向く者もあれば左を向いて平氣て居るものもある、すると大小を水平に指して居るから鞘と鞘とが相觸れて、ガチャガチャ音を立てる始末てある、鐵砲ても何ても西洋から來た物は、何ても宜いものと思つた極端な西洋崇拜時代てあつたから夏行軍するのに小隊長は洋傘を一本宛持ちそれを翳して日射を避け乍ら行軍すると云ふ風て、今見れば宛てポンチてある、又冬は今田舍者の着る赤毛布を着て居た、赤毛布といへば今は田舍者の代名詞になつて居るが、當時は赤毛布を着て居た者は餘程の灰殼てあつた、又鐵砲も元のエンビルと云ふものすらなく、ゲベーレと云ふ和蘭式てあつた、極く舊式なものて銃身が太く長く引金の所に環があり、一發の彈丸を籠めるにも大變面倒な手數が懸つて可成の時間を要し號令て丸を籠めるのに十二段の順序を經なければならぬと云ふ厄介至極の鐵砲てあつた、今の四發も五發も連發が出來るやうになつたのは大變な進歩てある、實戰の時に一發籠めるにも隨分時間と手數とが要るから

ジッとして居つては敵の目標となり易い處から、立つて丸を籠め乍ら鉄を拽へつゝグルグル廻つて敵の狙を避けて居たてあるから、散兵線は一人殘らずグルグル廻りをやつたやうな有樣てあつた、射的場て射撃練習をするのにも、士農工商種々な出身の兵隊が集つて、丸が飛てもない方へ外れるやう亂暴なものてあつた。

又靴などと云ふ氣の利いたものはない、洗足て練兵場に出る、中には袴を穿き股立ちを取つた凛々しい姿の若者もあつた、草鞋穿きの者もあつた、さうして毎日鉦々の家から練兵場へ通つたのてある、靖國神社境内遊就館内に陸軍創始時代の軍裝として陳列してある繪畫などは、是等より餘程進歩した後のものてある、各藩共略〻同樣てあつて、小隊長が洋傘を翳して行軍すると云ふ一事を以て他の全班を推す事が出來やう、デ私の藩は譜第大名てあつたから、幕命を奉じて長州征伐の爲に長州の濱田口に行つて戰爭を行つた、次いて北海道討伐の爲六百人の兵を函館へ送ると云ふことになつた、是は丁度明治元年の事てある、私も其の一人として備後の鞆港を解纜し下の關に渡り、越前の敦賀、秋田の各地を經て函館に着した、私は此時初めて蒸汽船と云ふものに乘つた、私共は汽船の船底の石炭庫のやうな暗い所へ入れられて足も投出す事も出來ない狹い汚い所に押詰められたが、將校などは立派な所に居た、海上越前の敦賀から秋田へ航行の途中、暴風雨に遭遇して艱難辛苦を嘗めたが、兎に角函館へ到着した無事上陸して三四日經過すると、榎本武揚が軍艦を率ひて鷲の木に上陸したと云ふ報が達した、丁度函館へ着いてから四日目の曉方、突然、大野村に出發前進せよと云ふ命令か下つた、大野村には既に味方の兵か先着して居る、我々は砲兵てあつたので臼砲山砲を持つて行かなければならぬ、今ならば馬車や鐵道の便を借りれば、函館から大野村迄譯なく行かれますが、私は大砲を馬の背に乘せ夜道を大野村へと辿つたが、期節は丁度十月、北海道は追々寒くならうと云ふ頃て、道が非常に惡い爲に途中て馬が仆れたりして中々捗らない、序に其時の私の服裝を云へば、大小を指し筒つぽに段袋、今秋田青森邊の百姓は之を着て田畑て働いて居る樣なものを着て、腰の廻りには水呑を下げ草鞋を二足付けて持つて居た、そうして腹は段々餓つて來るが、今のやうに背嚢の中に堅麵麭が用意してある譯てはなし、疲れに疲れて大野村に着いたのは夜も仄々と明けはなれて曉の風身に泌む頃てあつた、是から足を洗つて宿屋へ上つてヤレ飯を食はうと思つて居るとポンポン豆を煎るやうな小銃の音が聞へて戰爭が始まつた、急いて分解してある大砲を結合して部落の中央に臼砲を据え付けた臼砲を發射するには彈丸（煙硝が入つて居る）を入て、鉛の先に付いて居る綱て見當を付け小銃に煙硝を詰めて火を點ずるのてあるが、照準定まらず、彈丸はどこへ飛んて行くか分らぬ、唯大きな音がするから景氣が頗る宜い、所て幕府の方即ち榎本の麾下の兵隊は、伏見鳥羽から上野奥州等に歷戰して、中々戰爭に馴れて居る、今此方の方て打つて居たかと思ふと、もう彼方の方て打つと云ふ風て、射撃も中々巧みて上手に戰爭をする、之に反じて自分等の方は津輕松前あたりの聯合軍てあつて、松前藩士などは陣羽織を着て大鎗を小脇に抱えて陣頭に立つと云ふ風て自ら活動に敏捷を缺き、僅かの間に大野村を包圍されて仕舞つた、サア退却と云ふのて津輕陣屋迄後退することになつたが、我々は大砲を持つて退却しなければならぬ、然るに其の時分の山砲は、二三發發射すると顚覆すると云ふ代物てあつたから、それを防ぐ爲釘付けとしてあつて、突嗟の間に運搬することが出來ない、それて臼砲は之を擔つて逃げると云ふことになつた、砲身の中へ一本の丸太を通し、私が先棒となり近藤某と云ふのが後棒となり、肩に懸けて擔つて逃るのに、近藤は二十五六の大變丈の高い大男で、私の方が丈が低いから棒が四十五度の角度になつて其の苦しい事一通てない、大砲擔つてドンドン逃げる後から、敵は喇叭を吹奏し乍ら追撃すると云ふ有樣、漸く津輕陣屋に入らうとすると、其の前の兩側の土手には既に敵が迫つて居るので、更に函館迄逃げ歸ると云ふことになつた、併し四十五度て鐵砲擔いて行けないか

ら、他の人に背負つて貰つた、デ、函館には侍從清水谷實英氏の嚴父清水谷公考氏が總督として居る又私の國の兵も半分は函館に殘留して居たから、同地へ向つて退却したのであるが、此の戰は全然敗北で、負傷者を收容するの暇なく皆遺棄して逃走して來て仕舞つて、是等の怪我人の運命がどうなつたか分らない、函館へ引揚けて來て見ると、皆出發した後で誰も殘つて居ない、海岸に西洋人が居つて私に向ひ早く船に乘れと云ふ、沖には英吉利の船が國旗を靡し黑煙を吐いて居て、其の周圍を回天開陽の軍艦が巡つて居る、居合せた船頭に對してあの船に漕ぎ寄せて呉れと交渉したが應じない、所へ恰も二三人自分の知つて居る者が來て、船を出せ、出さなければ斬るぞと威嚇して小舟に乘り移り、危險だと云ふので苦を被つて漸く英吉利船の舷側に着した時、同船は梯子を上げて今や將に出帆せんとする間際であつて、甲板から綱を下ろして貰ひた、之に取り縋つて乘船する事が出來た、それが丁度午後七時頃で、暮色蒼然として灣頭を包み偉く寒い海風が吹いて居た、其の日に飯と云ふものは函館から大野村へ向つて出發の際喫しただけであるが、終日ドンドン逃げて氣が張り詰めて居たから感じなかつたが、船に乘つて始めて空腹を覺えた、船の中に津輕藩士が居つたので、燒いた干鰯などを口に入れて僅に饑を凌いだ、斯て此船が青森に向つて出帆し、少しく進航するや後から敵艦數隻追躡して來たから、陸で戰死しなかつた代りに海の上で往生するのかと覺悟を定めたが、敵艦は程なく元來し方に引返へし、私は無事青森に上陸した、すると私の國の兵の過半は先着して或寺院に陣して居た、兎に角非常に空腹で閉口して居ると、人々も氣を利かして寺の門の外から大きな盥へ飯を盛り、味噌汁を拵へて來て呉れたので腹を滿した、是より後約三ヶ月を經た或日の事、青森灣に敵の軍艦二隻現はれたと云ふ通報があつたので、我々は直に海岸に出て臼砲を並べて發射の用意を整へて居た。敵艦は次第に進み來り陸より二里位の海上に浮んで居つた、津輕の三本檣のある帆前船の近へ來り、短艇を其帆前船に

派遣し何事か爲しつつあつたが、遂て其儘歸つて仕舞つた、我々も手持不沙汰で引揚たが其は何をしに來たのかと云ふと、我々が敗戰の際殘して來た負傷兵を十五人許り送還して呉たのであつた、其の齎す話に依れば、函館に置殘された是等負傷者は、函館病院に收容されて手厚い介抱を受け、榎本武揚も一週間に一回位は必ず見舞に來て親切に尋ねて呉れた、歸る時には大小は取り上げられたが、一人に就き三圓宛金子を貰つて來たと云ふ、私共は敵の手に落ちたならば慘虐に取扱はれて到底一命はないものと考へて居た、それを榎本武揚は敵の負傷兵を治療し好遇して呉れた、奥羽戰爭の時、或藩の兵隊は敵兵を捕虜にするや耳を切り取り鼻を削ぎ剩へ頭へ釘を打ち込み蠟燭を點じそれを見乍ら快哉を叫んで酒を酌んだと云ふ、さう云ふ暴虐に比較して榎本は負傷者を窘めるのは人道に悖へるものでないとて、優待して送り還したのは流石和蘭で文明の戰術を研究して來ただけある血も涙もある武士であると一同深く感じた、此の負傷者の家族の人々は歸つて來ないから戰死したに相違ないと思つて居た、今のやうな電信も郵便もなく、飛脚は青森から備後迄二ヶ月もかゝる時代であつたから、消息不明の爲或る若い妻君などは他へ嫁に行つて仕舞つて居た奇談もあつた、此頃松前侯は勤王を唱へて船を艤して青森へ渡つて、青森から弘前の城下に抵り津輕侯の厄介になつた、丁度今の白耳義王が國土を失ひ佛蘭西の食客となつて居るのと同じやうなものである、さうして松前侯の乘つた船が函館と青森の中間の海上に差蒐ると、俄に海が暴れて山なす狂瀾怒濤に船は木の葉の如く翻弄されアワヤ覆沒しさうに見えた、此の時松前侯は、祖先傳來の重代の寶刀を捧げて齋藤と共に海中に投じ、刀をば龍神に備へられた所が、忽ち風雨收まる浪も鎭まつたと云ふ宛て稻村ケ崎の新田義貞の樣な話もあつた、斯る中に明治二年となり、もう一度函館へ攻めて行くと云ふ計畫が成つた、此時に青森へ集まつたのが鹿兒島、山口、久留米、水戸、越前等の兵であつて、其の服裝は各藩毎に種々異つて居た、是等各藩の兵が往來

て出遇つて挨拶もせず迂濶して居ると、あの藩のやつは不禮だと言はれるので、『御尊藩は如何て御座る』と云ふやうな挨拶を交すのであるが、或者は『御弊藩の――』と自分の藩に御の字を付けたと云ふ笑話があつた、我々と鹿兒島人とは外國人と應待するやうな風であつた、或時往還で鹿兒島兵三百人餘りが津輕の兵と擦れ違つた事があつた、今ならば双方共道を右に避けて夫れ〳〵喇叭を吹奏して敬意を表して行進するのであるが、其の時分の事だからそんな禮儀のあらう筈なく、『貴様の藩が眞中を通るのは不都合だ許され「ぬ」』、『何だ貴様の藩こそ隅の方を通れ、俺は眞中を通る』と、互に譲らず鐵砲や刀をガチヤガチヤさせると云ふ風で喧嘩などは絶へない、併し乍ら風紀軍規と云ふものは極めて嚴重であつた、酒樓に上つて婦人に酌をさせると云ふやうなことがあれば、直に切腹ものである、其時分は命が餘程安かつた、藩の或者が借金をして首が廻らなくなる、苦しまぎれに『どうも屢々君方に御迷惑ばかり掛けて相濟まぬ、私は腹を切つてお詫する』と云ふので、氣の早い奴は『それは好からう』とばかりに、直に襷を上げて式の如く裏返へしと爲し、刀を渡して『是は能く切れる。サア是れて見事にやれ』と、到底切れない事は知り乍ら故意と迫る、中々切らないから『貴様は嚇しに腹を切るのか』と云ふて、責めると云ふ風であつた、又或藩の兵隊は赤い毛布を着て山岡頭巾と云ふ目ばかり出す頭巾を被つて居たが、其の藩を愚弄した歌に『音に名高き何何の兵隊、赤い毛布て大威張り』と云ふのがあつた、さうして鹿兒島藩の兵士などは、ゴロフクてズボンや背廣のやうなものを作り、赤い錦の布片を肩章として附けて居た、其中官軍の軍艦が七隻青森の近くの南部の港に一時碇泊して居たのを、榎本の方の海軍が偵察して回天、開陽、幡龍などと云ふ軍艦を以て、官軍の鋼鐵艦を奪いに來た、其の艦は當時日本唯一の鋼鐵艦で、元來榎本が亞米利加へ註文したものであつたが、それを横濱に廻航された時、官軍が横取りして仕舞つた、此の鋼鐵艦以下七隻の軍艦が南部の港に錨を下ろして居ると、敵艦三隻襲

撃し來り散彈を放ち乍ら鋼鐵艦目蒐けて進んで來た、回天は遂に鋼鐵艦に突賊して接近し、敵々相摩し、回天に乘つて居つた幕府の海軍士官は、鋼鐵艦に飛び乘つて刀を拔いて斬りまくり奮戰大に努めたが、どうしても奪うことが出來ず、遂に三隻の中一隻は燒失し殘る二隻は逃歸つて仕舞つた、兎に角七隻の官軍の軍艦に對し僅か三隻を以て襲撃を試みた敵の勇敢は實場の價値あるものと思ふ、序に其の頃の海軍士官の有樣を御話しすれば、夏などは素裸體の褌一つて刀を指して居ると云ふ風である、石炭が缺乏を告ぐれば、甲板を剝して焚くから甲板に大きな穴が出來ると云ふ事もあつて、兎も今から想像出來ない程てあつた、今申した通り青森に官軍の各艦が集合して再度函館攻撃を行ふことになつた、私共は七隻の軍艦の護衛を受け、佛蘭西のヤンシーと云ふ蒸汽船に乘つて出航した、青森を出て灣の入口迄進んだ時、前方から三隻の軍艦が進航して來た、日本の軍艦は直に喇叭を矢いて警戒する我々は之を見て此の青森の灣口て海戰が始まつて、敵

て討死して海底の藻屑となるかも知れぬと覺悟した、所が段々接近するに從ひ、三隻の中一隻は佛蘭西の軍艦て、他の二隻は英吉利の軍艦てある事が分つた、佛國軍艦は我々の乘つて居るヤンシー號の傍に來て、其艦長はヤンシー號にやつて來た、其の時分の艦長の服裝は今の海軍士官の通りて立派なものてあつたが、我々のは古道具屋の店曝し見た樣てあつた、此のヤンシー號と云のは佛蘭西の軍艦て『佛蘭西の軍艦は局外中立を守つて交戰國の軍隊を輸送してはならぬ、此の兵隊を直に殘らず陸へ上げろ』と迫つた、ヤンシー號艦長は、是迄の德川幕府は日本の國王たる天皇陛下に背くから天子樣が之を討伐するのてある、二國が戰ふのてなく逆賊を討つのてあると說明したがさう云ふ譯はない筈だと言つても中々承知しない、其の頃は丁度佛蘭西のナポレオン第三世時代て、佛蘭西から幕府へ澤山教師が來て居て非常な幕府贔負てあつたて、種々八釜しいことを言つたが遂に其の儘航行を續けて音部と云ふ所に上陸した、そこは江差の隣りてある、其處

から江差の背面へと進んで行つた、或日私共五人はかりは斥候として偵察に行くと、前方から馬が五頭に大砲其他の種々のものが來た、私共は物蔭の見えない所に身を潜ませ、引金に指を懸けて敵の接近するを待ち突然火蓋を切ると、敵は大に狼狽し馬を遺棄して逃走して仕舞つた、是が味方の最初の分捕品で、大砲が二門に西洋の行李が四個あつた、早速行李を開いて見ると、第一の行李には佛蘭西の書籍が詰めてあつたが、誰もそれを讀み得るものがなかつた、次の行李には葡萄酒其他が入つて居たが我々は生れてから初めて葡萄酒を見て何だか分らない、『それを貴樣一つ飲んだら大變だぞ』と騒いで居ると、少し蘭學を修めた寺尾と云ふ男が『それは葡萄酒だらう、毒だか何だか一つ試しに飲んでやらう』と云ふて、一口飲んで『是は中々美味い酒だ』と云ふて皆が飲んだと云ふ風があつた今一つ可笑しのは、其の頃時計の事をセコンドと言つた、矢張り函館戰爭の時其のセコンドか或山道に落ちて居たのを人夫が拾つた、兵士の少し怜悧な奴が、それを見て『オイ小さな蟲のやうな針が動いて居るぢやないか、今に見ろ破裂するぞ危い〻〻』と欺いて自分が拾つたと云ふ、セコンドを地雷火と思つた者もあつた世の中であつた、我々は函館へ進むのに山の中を通つたが、或隊は海岸に沿うて進軍した、其の山の中に堅固な臺場が築いてあつた、我々は隨分苦心して攻めたが中々落ちない、五日目に海岸の鷲の木の方の背面へ廻つて攻撃するやうになつて漸く落ちた、私共が後年初めて學校で教へられた天然鹿砦や塹濠と云ふものを幕府側に居た佛國教師が建造して居たのであるから中々落ちなかつた筈である、此の附近を次第に攻略して山の上に到着した時、灣内で海軍の戰爭が始まつた、私共はそれを五里程の山の上で見たが、函館の陸の方には辨天臺場と云ふのがあり、二十四門の大砲を据付けてあつた、又三隻の船は沖臺場になつて居た味方の軍艦七隻は函館の沖から辨天砲臺を攻撃するのである、遂て函館の西北の有川にドンドン砲聲が響いて砲彈が命中し、官軍の船が一隻撃沈するや、辨天砲

臺及び榎本の三艦は手を拍つて歡聲を揚げた、他に英艦二隻佛艦一隻が遠く青森の港外で觀戰して居た、此の時或る官軍の軍艦は千米突の近距離迄進んで行つて臺場に向つて小銃を發射したと云ふ珍談もある、其の中に有川の方で陸戰が始まつたから、私共は山を下りて行つたが、幕府の方には彰義隊の落武者などが居つて撃劍の達人甚らず、夜陰に乘じて官軍に襲撃を試み、歩哨などよく斬られた、併し陸戰の開始後遂に榎本の方は全く負けて休戰になつた、其の時榎本武揚と松平太郎は山田中將に面會して、『勝敗は分つた我々は降參するのだから御存分にして戴きたいが、部下の兵隊は何も罪がないのだから御許しを願ふ、茲に持つて來たのは自分が和蘭で修めた兵書であるから差上げます、鋼鐵艦は自分が亞米利加に註文した軍艦だが君の方で取つて仕舞つた、鋼鐵艦が僕の方にあつたならばもう二三ケ月支へる事が出來たらう』と言つた、そこて幕府の兵は皆函館の寺へ收容した、私共は五稜郭の榎本の居た所を見に行つた、其の居室は六畳位の狹隘な所で、天井も壁も射貫かれて彈丸が三四發落ちて居て慘憺たる有樣であつたが、大きな釣鐘のやうな大砲の砲身があつて、それを鉢にして松の木が生けてあつたので、榎本氏の人物も偲ばれ英雄の胸中閑日月ある風流嗣雅欽すべき哉と思つた、此時幕府方の騎兵は既に長靴を穿き柏車を付けて居たし、又、ジャケツの服を着て居たが、兵隊の服裝は斯うあらねばならぬと感じた、且將校などは皆セコンドを携帶して居た函館戰爭前後の陸軍の有樣は實に以上お話したやうなものであつた、現今の完備した軍制と比較しては霄壤の差である、話は變るが、由來歐米人と日本人とは總ての思想も違つて居るが、今度青島のワルデック將軍は、カイゼルより最後の一人となる迄敵に抗せよと命ぜられ乍ら、オメオメ降伏して仕舞つた、而も比較的怪我人が少なく能く防禦したと云ふので、カイゼルは勅語を下し勳章を與へたと云ふ、若し日本の將軍が三千なり四千なりの軍隊と共に青島を守つて、さうして空しく敵に降伏したならば日本の國民は勳章でもやら

うと云ふだらうか、榎本松平南氏は自分は死んで部下を助けたいと云ふた、又支那の丁汝昌も自殺した、常陸丸の乗組員も敵に捕へられず悲壯な最後を遂げたのである、徒に死なないで人命を重ずると云ふ理屈もあるか知れないが、西洋人と日本人とは氣分の相違があるやうだ、日露戰爭の時、私共は第一軍の左翼に居たが、佛蘭西語が少し話せるので俘虜の應接係をやつた、或時中尉と少佐と二人の捕虜が來たが、私に向つて第一着に松山へ行くか名古屋へ行くかと收容所を尋ね、次いで女房の所に手紙がやれやうかと問ふたから、多分出來やうと答へたが、國の事を忘れても女房の事は忘れられないと見えて、其の中尉は勇敢に奮戰して彈丸を蒙つて居たが、それを取る爲に日本の外科手術はどうかと訊いたから、大に進歩して居る直に取れるだらうと答へた、それで手術の爲病院へ連れ込み念々手術臺に上げて手術に取り蒐ると、儘かの怪我であるのにワイワイ子供のやうに大聲を揚げて泣き喚いて困らせた、同時に或日本兵は左の手を切斷するやうな大手術を受けたが、隨分痛かつたらうと思つたが決して痛いと言つたり泣いたりしない、そして手術が終つて一旦退出した後、再びノコノコ手術臺にやつて來た、『オイ貴樣何しに來たか』と聞くと、『先程手術した時靴を置いて參りましたから——』と云ふのであつた是は一品たりとも天皇陛下のお品を拜借して居るのだから、粗末にしてはならぬと言い聞かせてあるからである、又或兵が風邪に冒されて野戰病院に入院中、陛下の特別の御思召に依り侍從武官長が御慰問使として病院を見舞はれ、下士卒には若干の御下賜金があつたが、其兵士は『私は頂戴致しませぬ』と云ふ、『何故貴樣はさう云ふ事を言ふか』と尋ねた時『私は自分の不注意から風邪に冒されて此病院に入つて居るのでありまして面目ありませぬ。戰傷を蒙つて病院に收容された時には初めて陛下の御爲めに負傷したのであるから難有く頂戴致しませう』と述べた時には、實に私共泣きました、又或砲兵は砲彈を火砲へ運ばうとして持上げた時、敵彈の爲に砲を射擊せられた、其利那思はず足がよろめいて倒れたが、直に再び起き上がり砲彈を砲身の中へ突込んだ後、始めて絶命した、畢竟自分の任務を重んずると云ふ觀念が頭の中に染み込んでゐるからであらうと思ふ、是等は實に立派なもので、日本の華と云ふべきもの、壯烈鬼神を泣かしむるものである、日本人たる者は皆斯くありたいものと思ふ、又聞く所に依れば、獨逸軍は佛蘭西の兵が傷いて戰鬪力を失ひ降を乞うても之を容れず、却つて殺して仕舞つて其の所持せる金品を奪ふので、佛蘭西でも憤慨して獨逸の捕虜は將校下士卒の區別なく、人間として扱へば宜しい他に何等の恩惠を施す勿れと訓令したと云ふ之に反して、日本では今度の青島の捕虜に對して將校下士卒夫れ夫れ日本兵士と同樣の俸給を與へ、將校には從卒を附し相當の食事を供し散歩も許し、ツルデック將軍には妻君の同棲も許すと云ふ風で優遇歇待至らざるなしてある、實に日本は正義人道を重んずる君子國てある。此の正義人道に依つて世界を指導して行くべきてある。

▲虔で讀者に告く▼

●本誌購讀者にして數年間料金未拂の御仁も有之既に集金郵便を以て請求候へしも理由もなく拒絶せられ候は遺憾至極に候就ては雜誌整理上の實狀御賢察を垂れ本年二十二日迄屹度**御拂込**被成下度希上候

▲前金切の御仁は此際誌代御拂込方願上候

▲照會及拂込は

東京小石川白山前町十七番地

三上義徹

（振替口座東京二八八四〇番）

活動史

▲十一月五日淺草妙經寺講演開催
所感　中西貞幹
信仰　野口日主
▲十一月十五日統一團講演開催
我國民性と授業　江見乾丈
決戰と持久力　三上義徹
心　井村日成
▲同日小石川白山坂上東京白山會講演會開催
日蓮上人の青年時代　三上義徹
▲同月十六日同寺に戰歿紀念講演會開催
聖訓奉讀　中西貞幹
祝詞　遠坂一
戰後國民の覺悟　吉田堅靖
國家盛衰の歴史觀　小西眞雄
變　野口日主
感想讀　高木順
▲二十二日統一團會開催
活ける信仰　高木順
日蓮門下統合に就て　木多日生
▲二十九日統一團講演開催
表現論　小西體道
大正三年思想史の一班　三上義徹
日蓮門下統合に就て　木多日生
▲十二月一日小石川白山會講演開催
日蓮上人の事業　三上義徹

實體蓮華　國分顯有
長靈光を見ずや　熊井本光
功勳聚　井村日成
▲同日午後六時統一團顯本青年布教團の講演開催
▲同月八日小石川原町本念寺大道會開講
日蓮上人の勇氣　淺井
信仰の効果　江見乾丈
家庭の教訓　森本德章
信仰の對象　牧田英明
信仰は寶也　國分顯有
道場の意義　三上義徹

▲京　都▼

▲十一月一日妙滿寺に國禱會を修し平和克復を祈願す
▲同夜威武院に護正會を開き川崎英昭師法華の經講をなす
▲七日夜妙滿寺に帝大三高等の學生研究會あり『法華經大意川崎英昭』
▲八日午後六時より鐘紡に修養會あり『山岡本芳の修養二十則川崎英昭』
▲十日川東本正寺の宗經御會式を修し『婦人と信仰石井寛俊』
▲同夜威武院に護正會を開き川崎師法華經の經講をなす
▲十三日妙滿寺に報恩會を修し『信徒の心得銀井乾升』
▲十五日の午後一時より妙滿寺に京都兒童の追弔會を修し併てお師會あり『開會の辭能見杖薫』『六窓一猛金光孝碩』其他岩井校長等の講話あり
▲同夜妙滿寺講堂に京都天晴會を開き聽衆四百余名『日蓮門下七教團統合に就て』幹事川崎英昭『日本の將來文學士小林一郎』
▲廿八日夜學生研究會を開く『日蓮上人の教義及人格川崎英昭』
聖祖門下同志會の聯合布教には銀井乾升石井寛俊師等出席せり

▲大　阪▼

▲十一月十三日午後一時大阪中寺町蓮成寺に開催『道義の精神梶木日種』
▲同夜七時同寺に開く『人道の開顯三好信道』『宗教の得益石井寛俊』『國民精神の訓練梶木日種』
▲十一月十二日午後七時半生玉前町宝蘭寺に講演『奮鬪生活京藤義聖』『殺生論川崎英昭』
▲十三日午後二時同寺に講演開催『家庭と信仰京藤義聖』
▲廿二日午後二時同寺に婦人會開催『人生の運命京藤義聖』『甘露浪川崎英昭』

▲岡　山▼

▲十一月一日岡山縣下隨一の大題目開眼式執行講演開催『お題目大意能仁亭一』『顯道開祖原田日勇』
▲同七日夜安藤勝治宅講演『信仰原田日勇』
▲十二日夜本成寺宗經御會式を營む『無間地獄の道を塞ぐ原田圓勇』
十三日夜本城寺婦人會『報恩原田日勇』
▲二十二日夜會根馬藤俊德宅にて『明治天皇

御製に就て原田日勇』

▲廣　島▼

▲十一月三日新川場町本願寺に講演開催『信仰の實花大橋日義』
▲十一日同寺に開催『人生の幸福溝口會旭』『戰時と宗教島田顯恕』『戰爭と信仰大橋日義』
▲十二日同寺講演開催『天祐溝口會旭』『日本の柱島田顯恕』『勇士の人生大橋日義』
▲十三日同寺開催『日蓮上人の行化大橋日義』
▲十七日同寺開催『名體用具大橋日義』
▲廿日同寺開催『人生の價値大橋日義』
▲廿一日同寺開催『日本の柱大橋日義』

▲金　澤▼

▲十一月二十三日京都法光院金光孝碩師は本願坊日海上人の開基たる本行寺兼職の晋山式を行へり威島隆康師の祝詞檀家及有志の參列者多く新任の挨拶法話ありたり

▲千　葉　縣▼

明治天皇昭憲皇太后陛下の報恩並に戰死病者追悼大法會を千葉縣下顯本法華宗三百の寺院聯合して十二月五六七日の三日間東金町西福寺に於て大曾匠中田日遵師導師を勤め最も嚴肅なる大會を虔修せり參拜者の重なる者は歩道聯隊より東工兵少佐竹内山武郡長中田警察署長美外在郷軍人並に遺族等數萬人にして境内に溢るゝの盛況を呈せり餘興には角力煙火浜花節大弓競技等ありたり式の前後には晝夜大法鼓を打つて人心指導の大業を盡せり『國民の覺悟日暮玄靜』『帝國の使命と吾人の責任山田誠心』『信と力堂亮雄』『正義と平和北田信昌』『時代觀宮川光然』『現此の一言小幡我正』『自重今井俊員』『力横山會草』『鞭撻と不撓秋葉純一』『安心水村乾中』『國民的自覺喜藤海叔』『日宗信徒の自覺土屋眞容』『聖日蓮の宗教威島泰行』『反省すべき人生渡邊乾叡』『智目行足鶴澤純貞』『自己問顯增田智靜』『受持松永會淨』『眞の愛國心鈴木正二』
▲十一月十三日千葉縣印旛郡酒々井町經蔵寺於て會式を兼ねて戰死病没の追悼會を執行し中村日錦師導師の下に前田日應師の追悼文等あり會者貳百餘名『開會の辭前田日應』『日蓮主義の概要中村日錦』
▲十二月一日木更津町威武寺に於て戰勝報恩を盛修し午前は飛山日甫師午後は中村日錦師之を勤め奏樂中追悼文を朗讀せり參拜者は藤川君津郡長警察署長木更津町長外百餘名なりし
▲四日濱野本行寺に於て午前戰勝報恩會を修し飛山日甫師導師を勤め午後追悼會音樂大法要會を嚴修し中村日錦師導師として追悼文を朗讀し參拜者は千葉歩道聯隊代表者警察署長各村長推名村濱野村々會議員在郷軍人青年會地方重立等にて極めて嚴肅に且盛大なりき
▲十月廿八日山武郡南橫川芳墳寺にて午前法要午後講演會『開會の辭石井日遵』『身輕法重死身弘法小竹俊雄』『宣戰の御詔勅に就て土屋賢生』『日蓮聖人と基督威島泰行』
▲十一月八日同郡丘山村小野本願寺に講演開催『開會田邊是敎』『滿足向上小竹俊雄』
▲十五日大和村の本龍寺に開催『開會石川悟恕』『佛子の自覺北田信昌』『日本と西洋との異點堂亮雄』『心界の潛系小竹俊雄』
▲十九日東金町大豆谷長福寺にて開催『開會渡邊堅冲』『國力の充實小竹俊雄』
▲廿七日增穗村木崎正國寺『開會立花睿乘』『法性の拳滿山小竹俊雄』『心の獨立と日蓮主義土屋賢生』

▲栃　木▼

▲栃木町本化行學會にては十一月廿二日事務所高田則在に於て田中芳谷先生を屈請し日蓮主義講演會を開催せり會場たる事務所大廣間正面には田中智學先生親筆「行學不斷」の大額を掲げ金屏風を打ち廻らし周圍の楯間には少女會用聖訓の額三十餘有を奉掲し聽衆の歩一度場内に入れば之を拜して暗默の間佛種を心田に植えらるべく以て聖化し淨化すべき樣意を用ゐたりかくて定刻平岩平八郎氏「開會の辭を」述べ高田久次氏は「神武天皇建國の詔勅」を服部新五郎氏は「日蓮上人聖訓誡曉八幡鈔」を大塚惣十郎氏は「本化妙宗宗綱」をいづれも敬虔なる態度を以て捧讀し行學少女會員四十余名は花の如き姿に愛らしき合掌にて「立正歌」を勇壯に奉唱すやおて小池捨吉氏の紹介にて田中芳谷先生は「治道の日本と覺道の妙法」と題して懸河の辯を揮ふる其大要を記さば大聖

釋尊の宣說せる妙法は覺道面より法界眞理を說明し神武聖帝の建設せる日本國體は治道面より宇宙眞理を實行せるもの而して此二者が一體不二の活動なる所以を道破して日本中心世界統一大理想を開闡し世界人類の救主となれるは我が國聖日蓮大士なり世人は須く萬事を差措いて此大偉聖と大靈國とを研究せざるべからずと論じ進んで時局に對する國民の自覺を促す所ありて壇を下らる講演三時間鉄論風發理義整然滿堂の聽衆感慨として傾聽し其效効甚大なるを知る次で服部新五郎氏は「開會の辭」を告ぐ翌日擧行の「本化妙歸正式」及「入營式」參觀を希望勸誘して散會を告げたるは午後五時過ぐる頃なりき

▲本化妙宗歸正式及入營式翌廿三日新營祭を卜し會員高田安平夫妻大塚字一郎より請願せる歸正式會員上原信次郎服部新五郎より各店員の爲めに請願せる入營式を擧行せり當日の式場たる事務所樓上の大廣間は整く白布にて裝飾し處々菊花をあしらひ中央上段床の間には大曼荼羅御本尊を奉安し左右には眞榊を供へ上には注連縄を張り素綱の垂帳を下し前には白木机に香華等の供物を献げ之に對して式長壇を設け一見神靈の氣に打たるゝの感あり午前十一時第一隊にて式監は式場を警査し第二隊にて來賓參觀者を案内し第三隊の響くや式監先導にて烏帽子直垂の古雅優麗なる式服を着ぜる十數名の式員(本會員)は恭々として發場し式長田中芳谷先生を中心に設けの席に居並びこゝに歸正式を擧行する式は妙行正軌に遵據せるもの道場觀より讀誦までかたの如く了れば式長は起立し妙經を奉持し嚴然として歸正者に三秘授戒す次で拜調(諸法眞相鈔)正修至心唱題數百遍ありて式長は跪座して式文を奉ず「愛に新たに聖門に歸入し正法を信受せる(前記三名)切に曾遇を悔ひ一心に敬ひを修し以つて無窮の聖應を叩き奉る仰ぎ願はくば大慈物を攝し罪悟の子を恕み其法身を育し(前記三名)元誤つて邪法を信じ久しく慈父の護念に背く罪現至つて深く迷綱甚だ密なり一朝大慈の薫風に觸れ宿善頓に萌し乃ち正法を信受するを得識に是れ濁世の奇火中の蓮華なり深く慈恩を銘し厚く聖化に酬ゆる唯一事のみ有て此願を滿ずるに足る不退勇猛增上護持死身弘法の佛事是也今身より愽身に至るまで能く正法を持ち決して退轉せず護種護法其の誠を竭し隨順歡喜其の信を致さん別願三寶妙相大聖主昭聖垂護したまへ正子南無妙法蓮華經」右終つて國向發願三唱奉迎にて式を歎し式衆一同退場來賓及招待者に午餐を饗し休憩の後ち午後一時再び擊鼓にて入營式を擧ぐ式場警査參列者登場式衆登場前の如く先づ新營會發鼓を修して聖壽無疆寶祚萬歲を新念し次て入營式を行ふ本經轉讀の後禮裝整列せる愛らしき少女十數名は合掌敬禮してオルガンの調べに合せて莊重なる宗歌を奉唱す續いて起る木鐸の響き高く一同は發調唱題に至心唱題して護修すやがて式長は鞭鈴如として寶心に進む長時入營式者高貫政次郎(上原氏店員)中野幹一(服部氏店員)篠崎敬吉(會員壯丁)石崎利一郎(同上)の四名は起立合掌す式長は恭しく左の入營式文「一乘の佛子(前記四名)國法に據り兵役を奉じ將に衛衛に入らんとす愛に妙乘の聖會を最修し恭しく佛祖の靈鑒を仰ぐ誠に惟るに國は人の依止處にして又是れ道の示現處なり人は國を得て而て整ひ道は國に依て而て伸ぶ故に國を護るは則ち人を護る也神武建國の初より來り神人誠を以て一貫し君民正を以て一致す天下皆兵天子之が元帥たるは一に道義建國の洪範に由づ今兵役に就き國民の誠を致すは乃ち眞を守り正を行ふ所以にして而して其旨立正安國の大義に外ならず願くば佛祖の大靈冥に佛子の色心に加被し諸緣吉祥以て報國の聖役を全うせん焉南無妙法蓮華經」を奏して席に復り同向等式の如く式長の振鈴にてこの森嚴優美なる式典を終り整々たる太鼓の中に式衆は靜かに列席して退場式長田中先生は直ちに眼を改め侍者兩名を從て講壇に現はれ兵役に對する世上淺薄の迷想を打破し日蓮主義の見地より兵役が國民の義務中尤も光明あり榮譽ある所以を論明せらるこの式典が當地方に類例なき事とて講演と相持つて其夫の印象を在郷軍人學校職員新聞記者壯丁父兄等の來會者に與へたるは疑ひなし

■新年施本出版■

文學士　小林一郎先生述

日本國民の信仰

一切迫した時代　二不用意の過
目　三人の境遇　四物質的進歩の行止り
次　五國家と個人　六法華弘通の時機
七日蓮聖人の活教訓

小林先生の演說は平易なる事柄を捕へて高尚なる問題を解し、目前の出來事を巧妙に比論して宗教の實感を說く點に於て殆んど天下一品なり、其の文も又此くの如く極めて平易の文字を以て面白く飽くことなく讀ましめて深き感化を與へる點に於て比類なし、本篇は先生が此の特長を以て巧に現代と日蓮主義の交渉を聞き、熱烈に日蓮主義を奬めたるもの日蓮主義者傳導の良施本なり

■定價　一部貳錢　五十部以上一錢五厘　百部以上總て壹錢【五拾部以下は割引なし】

■郵稅　六部迄貳錢　五拾部迄入錢　百部拾貳錢　貳百部拾六錢

■表裝　石版二色摺

發行所　山梨縣小井川局區內　天鼓雜誌社　振替東京壹貳八貳五

成功無疑

成功せざれば教授料を返金す

▲催眠術通信教授（本會創立明治三十六年）目下高等催眠學講義錄は拾卷拾冊發行完結し居りて入會の最好時機なり

▲教授料

前期　一金貳圓五拾錢　月に金五拾錢宛五ケ月に分納可

高等催眠學講義錄自第一卷至第五卷五冊菊大判四百四拾有餘頁寫眞版木版數多挿入美本配布且催眠術實驗會に出席し又は會長に質問する權利を與ふ

後期　金貳圓五拾錢　月に金五拾錢宛五ケ月に分納可

高等催眠學講義錄自第六卷至第拾卷五冊菊大判三百八拾有餘頁寫眞版木版數多挿入美本を配布し、嶄新奇拔の催眠法無慮六拾有餘種を教授す

▲教授料全額（一度拂は）金四圓（合本總タニース金文字入美麗本希望者は別に五拾錢增）

高等催眠學講義錄至第一卷自第十卷十冊總頁數九百二十八頁內本文八百二十六頁目次八十五頁寫眞版十七頁に尙景品として桑原俊郎著精神靈動術會員實驗報告集の二大書を添て一度に郵送す

讀め　自己の心體を健康にせんとする人
他人の病癖を救濟せんとする人

僅か金五拾錢で會員になれる

申込所　東市芝區琴平町　精神研究會　振替二三五一番　電新一八七五番

脳胃の能醫

NŌ is No.1

脳と胃は極めて重要の關係を有す然るに脳神經を鎮靜する藥物は概ね胃腸の機能を害し姑息的たるを免れず本劑は脳神經藥たると同時に消化器を健全ならしむる作用を有す故に理想的の好結果を得べき事を確信す

主治効能　脳神經衰弱●ヒステリー●不眠症●脳痛●頭痛●惡夢●胃加答兒●胃弱●消化不良

●藥價三日分金參拾錢　●五日分金五拾錢

本誌讀者に限り約三十%の割引特權あり希望者はハガキにて申込を乞ふ

▼ノーヰはイヰ藥▲

金澤山石堂

東京市下谷區上根岸町百十一番

電話下谷二二五九番

日宗法衣專門

青雲帽　希教服　袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条

御飯田法衣店

振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さゞる自然の特徴を有し候

小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御滿足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價　▲一部郵稅共金六錢五厘○半年分金參拾九錢　一ヶ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず

廣告料　表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事

雜誌及廣告料金拂込　東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四〇番へ拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候

▲讀者の特權——本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし（但し採否は編者の權内とす）

▲講演の需めに應ず（申込は編輯所へ）本誌讀者にして國のため人の爲め日蓮主義講演會を開かんとするものは御申込次第何時なりとも應諾可致候（但し旅費は實費だけ）

大正三年十二月十五日印刷發行

發行兼編輯人　東京市小石川區白山前町十七番地　三上義徹

印刷人　鈴木日雄

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團（電話下谷六千三百十番）

編輯所　東京市小石川區白山前町十七番地

（祝）
第二百三十八號
明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正三年十二月十五日發行（毎月十五日發行）

◀軍國民の必讀すべき書◀

▲無駄な贈答＝軍國の歳末年始には斷然之を廢せよ▼

◎本書は日蓮主義實行者たる小原陸軍少將が萬代の偉功を奏せる清正公の人格的根底に就て軍人勅諭の精神と日蓮上人の思想とによりて講述せられたるもの國歩艱難の時我が國民精神を鼓舞する上に多大の權威あるを信じ歳末年始の贈答用として發行したるもの也

陸軍少將　小原正恒閣下講述

▲軍神加藤清正公

◎表紙題字＝正四位勳二等矢野茂閣下執筆
◎體裁＝四六判半截二十六頁表紙色刷
◎定價＝一部金四錢五迄部郵税二錢五十部迄八錢
◎歳末年始に＝砂糖や半紙の贈物を廢し本書を以て精神開發の資糧に供せよ
◎豫約大割引＝十一月廿五日迄に（五十部以上以金相談へ申込は郵税は當方一部金二錢の實費を以て頒つ）（にて負擔す）
◎送金＝東京小石川白山前町十七三上義徹　振替口座東京二八八四〇番

▲日蓮主義によりて訓練せられたる清正公は軍國民の學ぶべき人格也▲